



平成 26 年度
富士山麓外来植物等調査業務委託

報告書

(抜粋)

平成 27 年 1 月

株式会社 環境アセスメントセンター

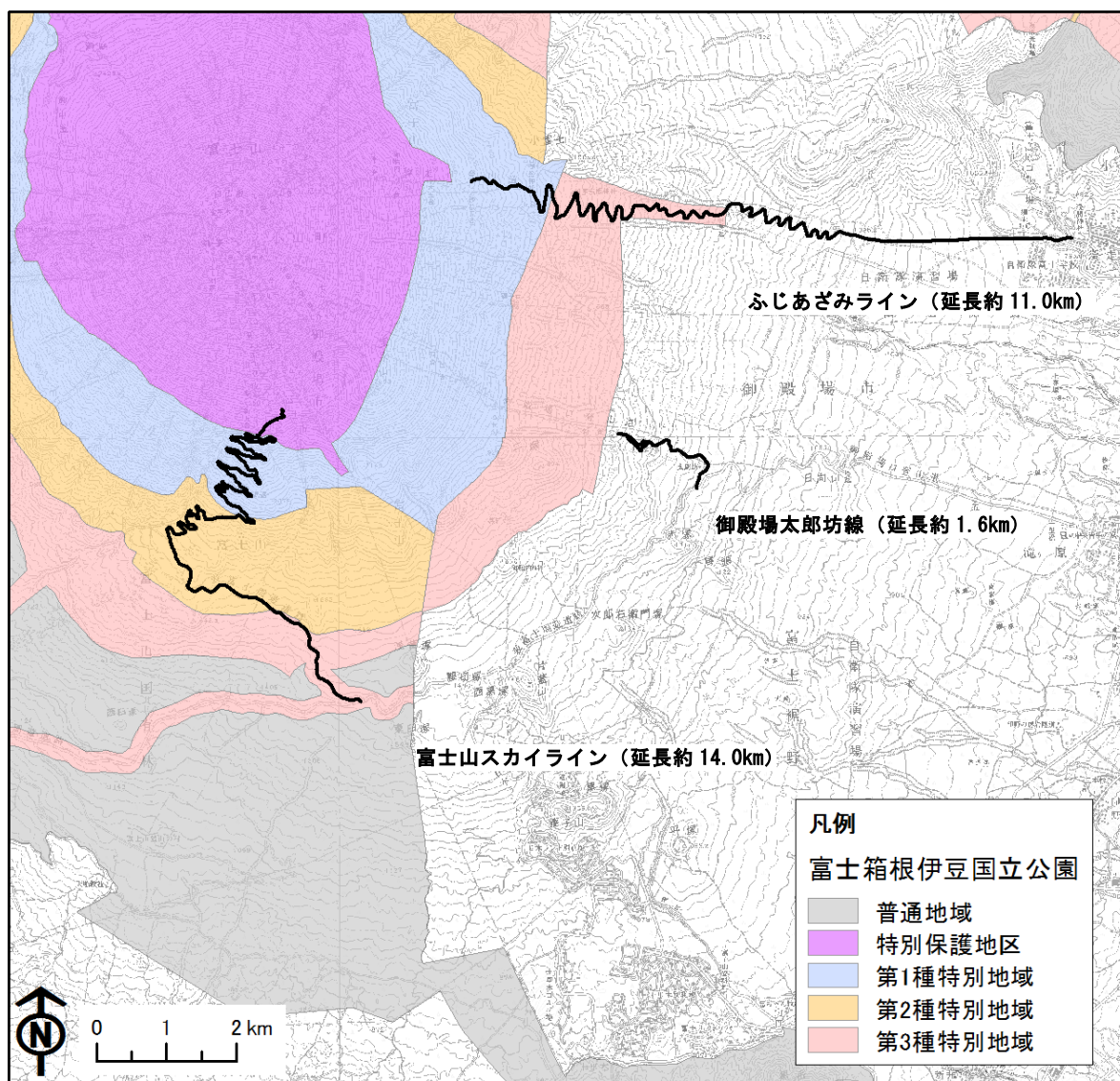


図 1.5.1 富士箱根伊豆国立公園と調査場所 位置図

(3) 外来種

本業務では、以下の選定基準に該当する種を外来種として選定した。なお、これらの基準に該当しない、その他の外来種については、写真の撮影を行った。

表 1.5.3 外来種選定基準

法律等		選定基準	
特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律【外来生物法】 (平成 16 年 6 月 2 日法律第 78 号) (最終改正:平成 25 年 6 月 12 日 法律第 38 号) 外来生物法に基づく飼養等の規制が課されるものではないが、これらの外来生物が生態系に悪影響を及ぼすことから、利用に関わる個人や事業者等に対し、適切な取扱いについて理解と協力が求められるもの。 【環境省 HP】	特定外来生物	外来生物（海外起源の外来種）であって、生態系、人の生命・身体、農林水産業へ被害を及ぼすもの、又は及ぼすおそれがあるもの。	
	要注意外来生物	類型 1	被害に係る一定の知見があり、引き続き指定の適否について検討する外来生物
		類型 2	被害に係る知見が不足しており、引き続き情報の集積に努める外来生物
		類型 3※	選定の対象とならないが注意喚起が必要な外来生物（他法令の規制対象種）
		類型 4	別途総合的な取組みを進める外来生物(緑化植物)

※類型 3 は、平成 26 年 4 月現在において、植物では該当する種はないが参考として記載した。

2.1.3 外来種

(1) 結果概要

外来種は、7 科 16 種 9,067 個体（おおよその個体数）を確認した。確認状況を表 2.1.4 に示す。確認した外来種は、全て要注意外来生物で、外来生物法により指定されている「特定外来生物」は確認されなかった。

路線別にみると、富士山スカイラインでは、7 種類が 455 地点で確認され、セイヨウタンポポの確認が多かった。御殿場太郎坊線では、6 種が 46 地点で確認され、セイヨウタンポポの確認が多かった。ふじあざみラインでは、15 種が 410 地点で確認され、ハルジオンの確認が多かった。

外来種は車道脇や駐車場など、車両や人の往来が多い箇所を確認され、特に駐車場や樹林外の開けた環境では、まとまって分布していた。また、現段階では登山道内部への外来種の侵入は確認されなかった。

表 2.1.4 外来種確認状況

No.	科名	種名	特定外来生物	要注意外来生物	富士山スカイライン		御殿場太郎坊線		ふじあざみライン		合計	
					地点数	個体数	地点数	個体数	地点数	個体数	地点数	個体数
1	タデ	エゾノギンギシ		類型 2					2	31	2	31
2	アブラナ	ハルザキヤマガラシ		類型 2	2	2					2	2
3	マメ	イタチハギ		類型 4					4	24	4	24
4	アカバナ	メマツヨイグサ		類型 2			1	2	29	456	30	458
5	オオバコ	ヘラオオバコ		類型 2					4	53	4	53
6	キク	オオブタクサ		類型 1					1	10	1	10
7		オオアレチノギク		類型 2					1	1	1	1
8		ヒメムカシヨモギ		類型 2					23	68	23	68
9		ハルジオン		類型 2	10	18	3	22	69	782	83	832
10		セイタカアワダチソウ		類型 1					1	1	1	1
11		ヒメジョオン		類型 2	27	219	8	134	100	605	136	968
12		セイヨウタンポポ※		類型 2	301	4510	29	122	157	728	487	5360
13	イネ	メリケンカルカヤ		類型 2					6	52	6	52
14		カモガヤ		類型 4	22	212	4	12	10	317	36	541
15		オニウシノケグサ		類型 4	1	1			2	21	3	22
16		オオアワガエリ		類型 4	94	661	1	2	1	1	96	664
合計	7 科	16 種	0 種	16 種	457	5623	46	294	410	3150	913	9067

※：セイヨウタンポポは要注意外来生物の「外来タンポポ種群」に該当する。

凡例) 類型 1：被害に係る一定の知見があり、引き続き指定の適否について検討する外来生物

類型 2：被害に係る知見が不足しており、引き続き情報の集積に努める外来生物

類型 4：別途総合的な取組みを進める外来生物(緑化植物)

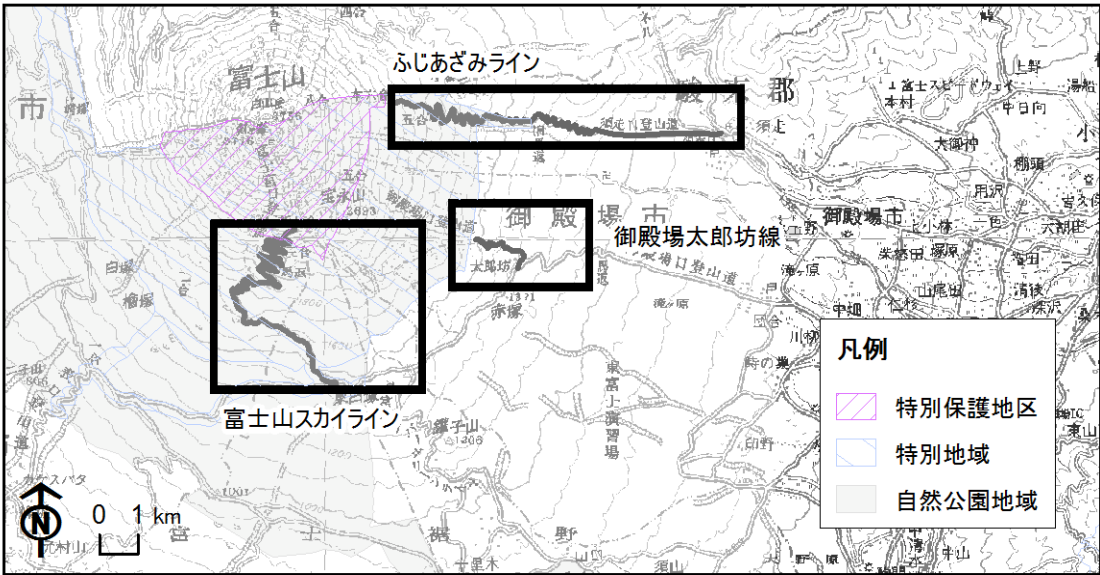
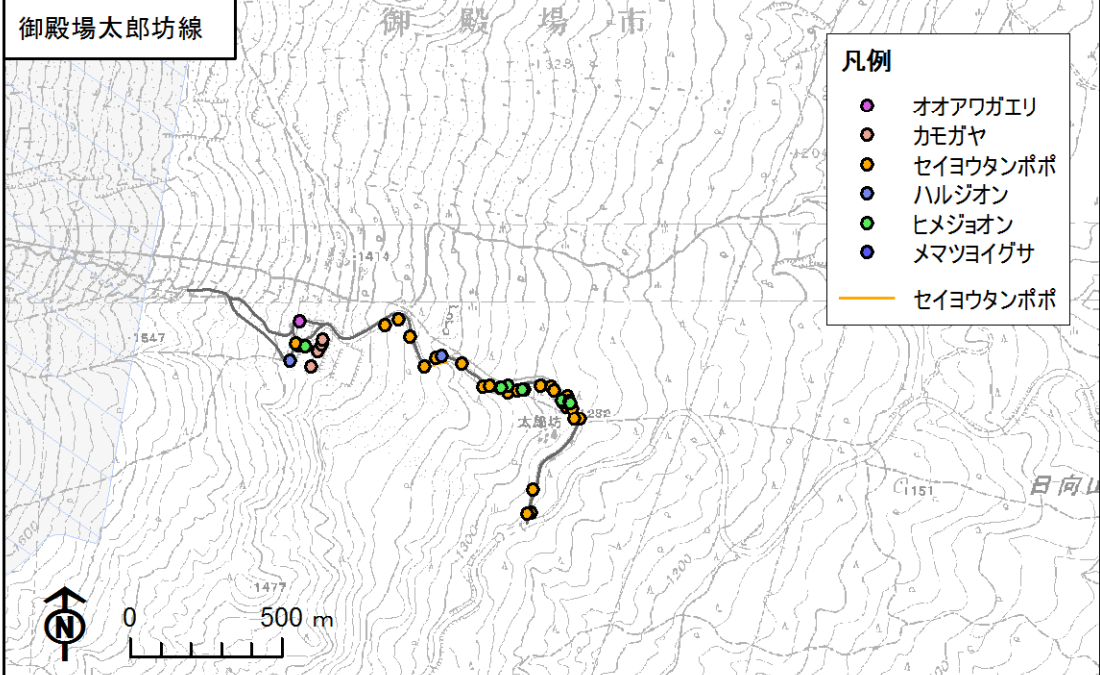
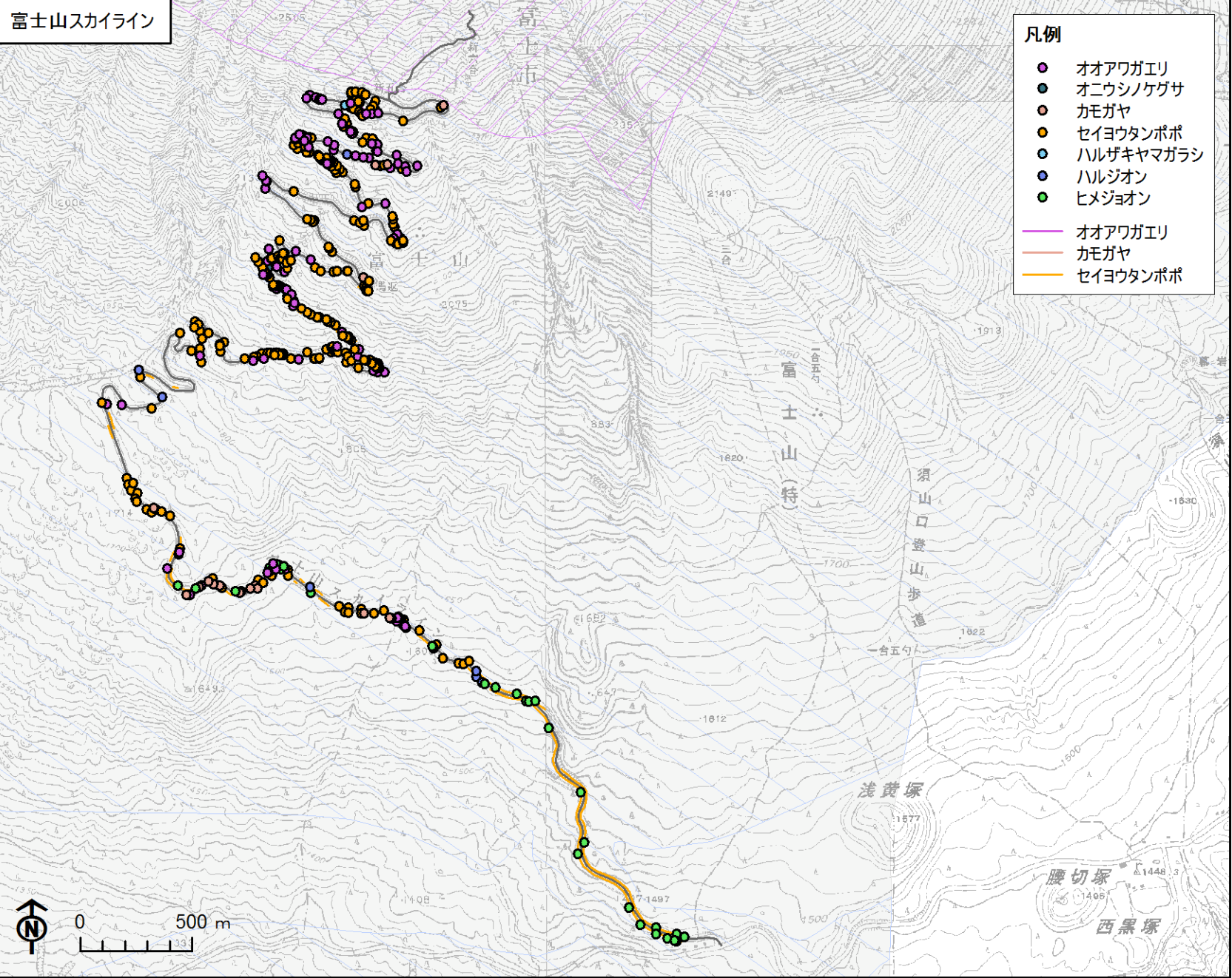
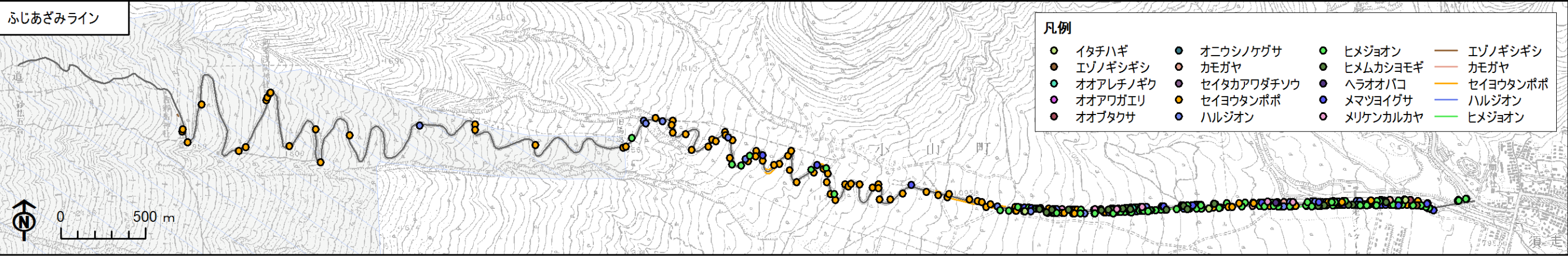


図 2.1.51 外来種確認地点位置図

(3) 外来種別の確認状況

1) エゾノギシギシ

エゾノギシギシは、ふじあざみラインの標高約 1,980m の須走口五合目付近で 1 地点 30 個体、標高約 830m の車道脇で 1 地点 1 個体を確認した。須走口 5 合目付近の地点は駐車場として利用されている空き地であり、車両や人の移動により持ち込まれたと考えられる。開花・結実の確認されておらず、根生葉のみの確認であった。国立公園第 1 種特別地域内で確認された。

表 2.1.6 種の解説（エゾノギシギシ）

種名等	エゾノギシギシ（タデ科） 別名：ヒロハギシギシ	
写真		
	個体（ふじあざみライン） 平成 26 年 6 月 4 日撮影	生育環境（ふじあざみライン） 平成 26 年 6 月 4 日撮影
外来種選定基準※	要注意外来生物 類型 2 （被害に係る知見が不足しており、引き続き情報の集積に努める外来生物）	
特徴※	タデ科の多年草で、高さは 0.5～1.3m。開花期は 6～9 月。両性花。瘦果は風、雨、飼料に混入して伝播される。1 個体当たりの種子の生産量は 5,000～100,000 個、種子の寿命は 20 年以上との報告がある。根茎による繁殖力が強い。周年にわたって発生、生育し、耐寒性が強い。	
生育環境※	牧草地、樹園地、芝地、畑地、路傍、河岸、荒地、林地などに生育する。日当たりの良い湿地、酸性土壌を好むが、肥沃地からやせ地まで適応する。耐寒性が強いため、亜高山帯の自然公園などにも侵入している。	
原産地・分布※	ヨーロッパ原産、北アフリカ、アジア、オセアニア、南北アメリカに分布する。国内へは、非意図的導入により、明治中期に渡来したと考えられる。1909 年に北海道で確認された。全国に分布する。	
被害影響※	北海道や、本州の亜高山帯にある国立・国定公園など、自然性の高い環境や希少種の生育環境に侵入し、駆除の対象になっている。	

※環境省 HP（<http://www.env.go.jp/nature/intro/>）より引用

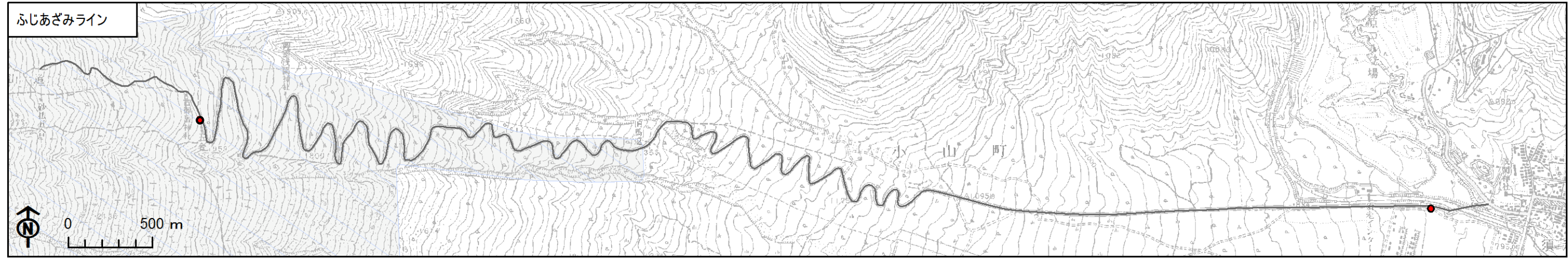
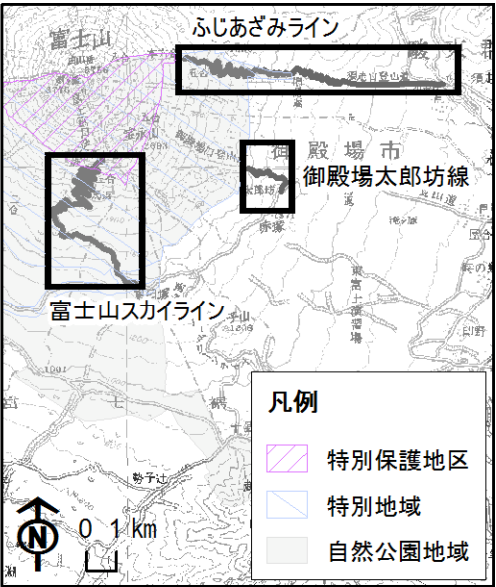


図 2.1.52 外来種（エゾノギシギシ）確認地点位置図

2) ハルザキヤマガラシ

ハルザキヤマガラシは富士山スカイラインの標高約 2,340m の車道脇石垣で 1 地点 1 個体、標高約 1,660m の高鉢駐車場で 1 地点 1 個体を確認した。2 地点ともに開花が確認されたため、種子の拡散が懸念される。国立公園第 1 種特別地域及び第 2 種特別地域において確認された。

表 2.1.7 種の解説（ハルザキヤマガラシ）

種名等	ハルザキヤマガラシ（アブラナ科） 別名：セイヨウヤマガラシ、フユガラシ	
写真	 個体（富士山スカイライン） 平成 26 年 6 月 3 日撮影	 生育環境（富士山スカイライン） 平成 26 年 6 月 3 日撮影
外来種選定基準※	要注意外来生物 類型 2 （被害に係る知見が不足しており、引き続き情報の集積に努める外来生物）	
特徴※	アブラナ科の越年草～短命な多年草で、高さは 0.2～0.9m。開花期は 5 月。長角果は風、雨、動物、人間により伝播される。1 個体辺りの種子生産量は 40,000～116,000 個との報告がある。根茎により繁殖する。	
生育環境※	畑地、水田、荒地、草地、路傍、河岸などに生育する。山地の林道沿いにもみられる。冷涼で日当たりが良く、湿った肥沃地を好む。標高 1,800m 以上の亜高山帯にも生育している事例がある。	
原産地・分布※	ヨーロッパ原産、北アフリカ、オセアニア、北アメリカ、アジアに分布する。国内へは、1910 年頃ムギ類に混入して非意図的に導入されたと考えられる。全国に分布する。	
被害影響※	八ヶ岳中信高原国立公園にある霧ヶ峰では、ハルザキヤマガラシが増加し、在来種と競合のおそれがあるため、駆除作業が行われている。	

※環境省 HP（<http://www.env.go.jp/nature/intro/>）より引用

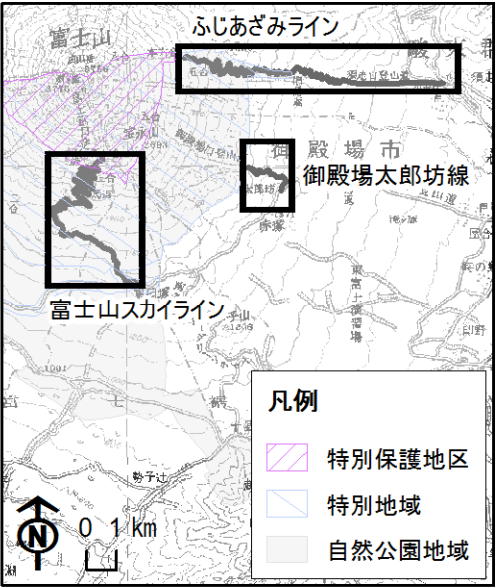
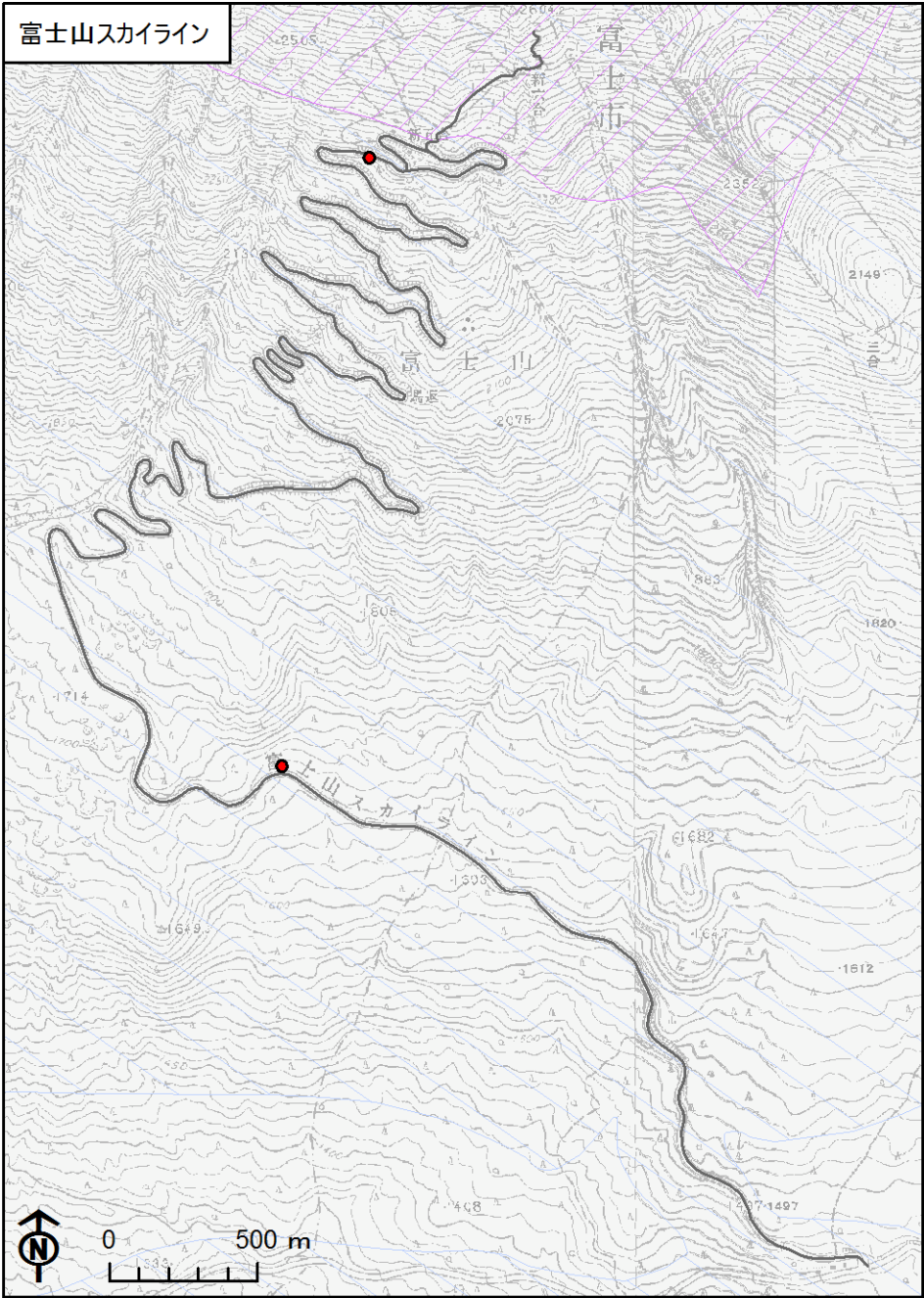


図 2.1.53 外来種（ハルザキヤマガラシ）確認地点位置図

3) イタチハギ

イタチハギは、ふじあざみラインの標高約 830m～1,040m で 4 地点 24 個体が確認された。いずれの地点も開花及び結実の確認されていない。イタチハギの確認箇所周辺は、自衛隊演習地が近く、車両の往来が多い場所のため、車両や人の移動によって侵入したものと思われる。国立公園内での確認はなかった。

表 2.1.8 種の解説（イタチハギ）

種名等	イタチハギ（マメ科） 別名：クロバナエンジュ	
写真		
	個体（ふじあざみライン） 平成 26 年 9 月 19 日撮影	生育環境（ふじあざみライン） 平成 26 年 9 月 19 日撮影
外来種選定基準※	要注意外来生物 類型 4 （別途総合的な取組みを進める外来生物(緑化植物)）	
特徴※	マメ科の落葉低木で、高さ 1～5m になる。開花期は 4～7 月。両性花。虫媒花。豆果をつける。空中窒素の固定を行い、土壌窒素を蓄積する。生長が速く、耐暑性、耐乾性、耐陰性がある。	
生育環境※	荒地、路傍、崩壊地、土手、河川敷、海岸などに生育する。自然度の高い亜高山帯にも定着、生育。	
原産地※	北アメリカ南部からメキシコ原産。国内へは、1940 年代以降に砂防、護岸、防風、緑化、生垣、飼料、観賞用として韓国等から本格的に導入される。全国に分布する。	
被害影響※	自然性の高い亜高山帯等にも侵入し、霧ヶ峰等で在来種と競合し問題視されている。石川県の白山地域では、蛇谷の下流に侵入し景観を損ねるとして問題になっている。河原の在来植物と競合、駆逐する等の理由で、多くの都道府県で侵略的な外来種とされている。	

※環境省 HP（<http://www.env.go.jp/nature/intro/>）より引用

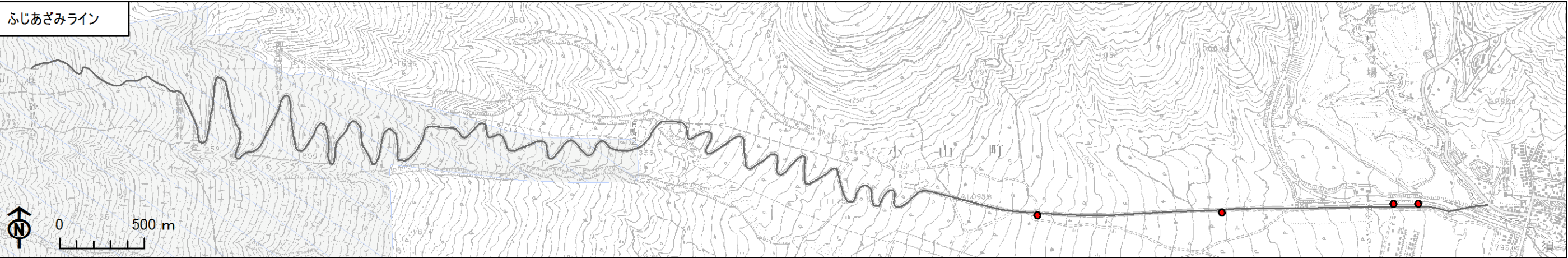
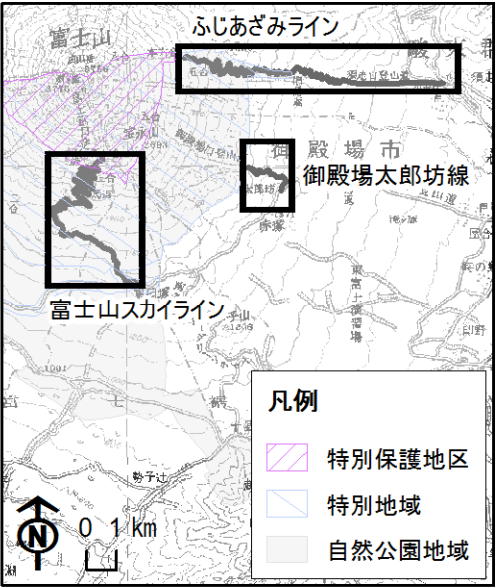


図 2.1.54 外来種（イタチハギ）確認地点位置図

4) メマツヨイグサ

メマツヨイグサは、御殿場太郎坊線の標高約 800m～1,240m で 1 地点 2 個体、ふじあざみラインの標高約 800m～1,240m で 29 地点 456 個体を確認した。7 月及び 9 月調査で開花が確認されており、種子の拡散が懸念される。なお、国立公園内での確認はなかった。

表 2.1.9 種の解説（メマツヨイグサ）

種名等	メマツヨイグサ（アカバナ科）	
写真	 個体（御殿場太郎坊線） 平成 26 年 7 月 30 日撮影	 生育環境（御殿場太郎坊線） 平成 26 年 7 月 30 日撮影
外来種選定※基準	要注意外来生物 類型 2 （被害に係る知見が不足しており、引き続き情報の集積に努める外来生物）	
特徴※	アカバナ科の一年草～越年草で、高さは 0.3～2.0m。開花期は 6～10 月。両性花。蒴果は風、雨、鳥により伝播される。自家和合性がある。1 個体当たりの種子の生産量は 5,000～100,000 個との報告がある。種子の寿命は、数年～数 10 年との報告がある。	
生育環境※	畑地、牧草地、樹園地、路傍、河川敷、荒地、草地などに生育する。開けた攪乱された場所を好むが適応力は大きい。燐含量が少ない土壌でもよく生育する。	
原産地・分布※	北アメリカ原産、南アメリカ、ヨーロッパ、アフリカ、アジア、オーストラリアに分布する。1920 年代に観賞用として導入された。全国に分布する。	
被害影響※	亜高山帯や砂丘等にも侵入し、在来種との競合のおそれがあるとして問題になっている。上高地への侵入がみられ、特に注意を要する種類のひとつとされている。鳥取砂丘では、非砂丘植物のひとつとして、分布の拡大が問題になっている。	

※環境省 HP（<http://www.env.go.jp/nature/intro/>）より引用

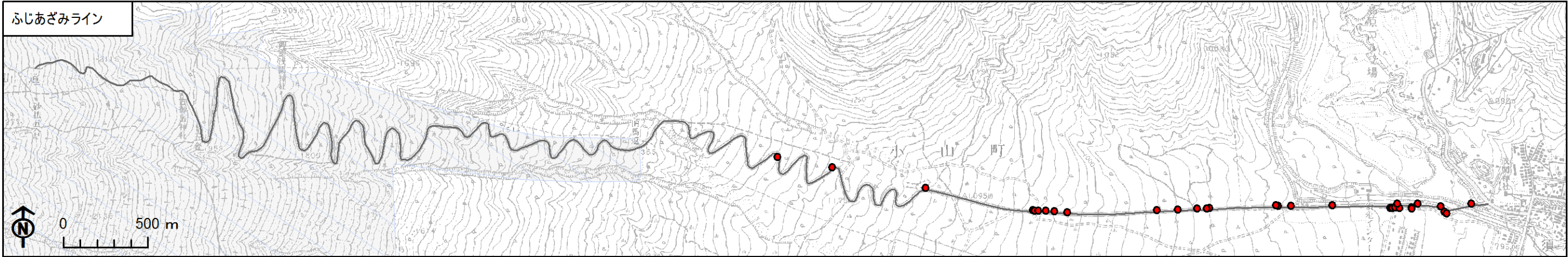
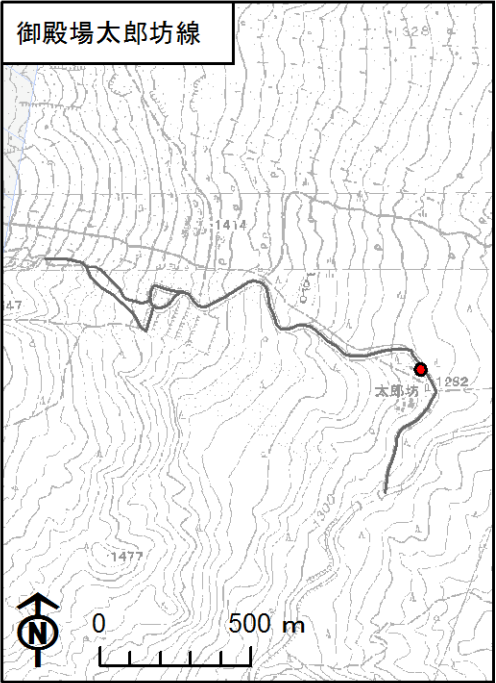
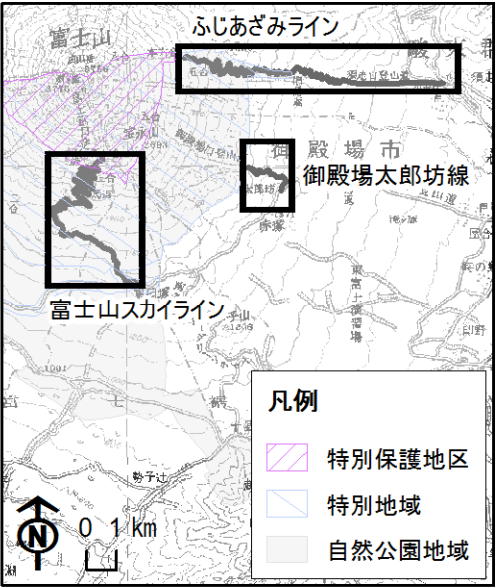


図 2.1.55 外来種（メマツヨイグサ）確認地点位置図

5) ヘラオオバコ

ヘラオオバコは、ふじあざみラインの標高 860m～900m の車道脇で、4 地点 53 個体が確認された。開花が確認されており、種子の拡散が懸念される。ヘラオオバコの確認地点周辺は、自衛隊演習地が近く、車両の往来が多い場所のため、車両や人の移動によって侵入したものと思われる。国立公園内での確認はなかった。

表 2.1.10 種の解説（ヘラオオバコ）

種名等	ヘラオオバコ（オオバコ科）	
写真	 個体（ふじあざみライン） 平成 26 年 7 月 30 日撮影	 生育環境（ふじあざみライン） 平成 26 年 7 月 30 日撮影
外来種選定基準※	要注意外来生物 類型 2 （被害に係る知見が不足しており、引き続き情報の集積に努める外来生物）	
特徴※	オオバコ科の多年草で、高さは 0.2～0.7m。開花期は 4～8 月。両性花。蒴果は風、雨、動物（胃中でも生存）、人間などにより伝播される。1 個体当たりの種子生産量は、発生密度により 68～10,000 個以上になるとの報告がある。種子の寿命は 5 年程度との報告がある。根茎により繁殖する。	
生育環境※	寒帯～熱帯に分布する。畑地、樹園地、牧草地、芝地、路傍、荒地、空地、河川敷などに生育する。日当たりの良い所から日陰地まで生育する。温度適応性が大きい。土壌環境への適応性も高い。	
原産地・分布※	ヨーロッパ原産、世界中に分布する。江戸時代末期に、非意図的導入（牧草種子に混入）により侵入したとされる。全国に分布する。	
被害影響※	繁殖力が強く、主に河川敷に生育する在来種と競合し、駆逐するおそれがある	

※環境省 HP（<http://www.env.go.jp/nature/intro/>）より引用

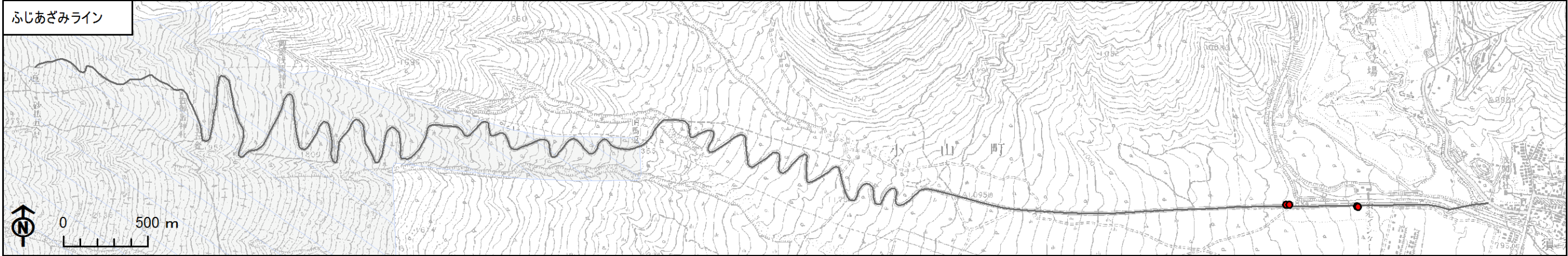
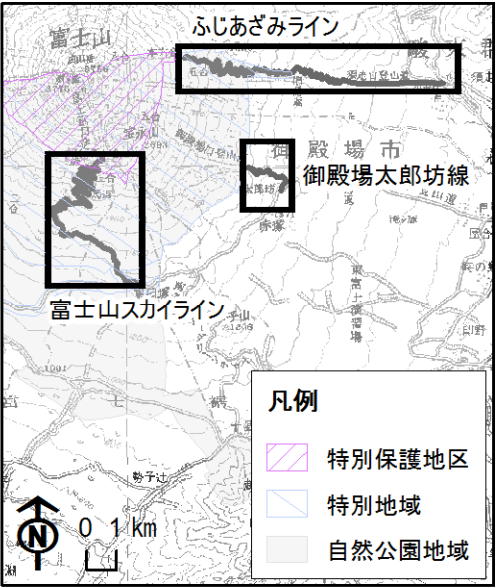


図 2.1.56 外来種（ヘラオオバコ）確認地点位置図

6) オオブタクサ

オオブタクサは、ふじあざみラインの標高約 830m の車道脇で 1 地点 10 個体を確認した。9 月調査で開花が確認されており、種子の拡散が懸念される。国立公園内での確認はなかった。

表 2.1.11 種の解説（オオブタクサ）

種名等	オオブタクサ（キク科） 別名：クワモドキ	
写真		
	個体（ふじあざみライン） 平成 26 年 9 月 19 日撮影	生育環境（ふじあざみライン） 平成 26 年 9 月 19 日撮影
外来種選定基準※	要注意外来生物 類型 1 （被害に係る一定の知見があり、引き続き指定の適否について検討する外来生物）	
特徴※	キク科の一年生草本で、高さ 1～4m になる。開花期は 7～10 月。1 株当たり 275 個の種子をつけるとの報告がある。土壌中の種子の寿命が 21 年に及ぶとの報告があり、土壌シードバンクを形成する。瘦果は雨、鳥、人間により伝播される。工事現場や採石場周辺などの人為的攪乱地で多くみられることから、種子を含む土壌が工事車両によって移動され、分布を拡大していることが示されている。	
生育環境※	畑地、樹園地、牧草地、河川敷、路傍、荒地、堤防などに生育する。肥沃で湿った所を好み、河川敷などでは密集して生える。	
原産地・分布※	北アメリカ原産、ヨーロッパ、アジアに分布する。1952 年に静岡県清水港と千葉県で確認されて以来、全国でみられる。飼料穀物や豆類に混入して侵入したとされる。	
被害影響※	河川敷等でみられる大型の一年生草本で、河原の固有種を含む在来種との競合や駆逐のおそれがあることから、各地で駆除が実施されている。天竜奥三河国定公園にある天竜川ではオオブタクサが上流全域でみられ、他の外来植物とともに、河川敷固有の植物が減少する原因の一つとなっている。	

※環境省 HP (<http://www.env.go.jp/nature/intro/>) より引用

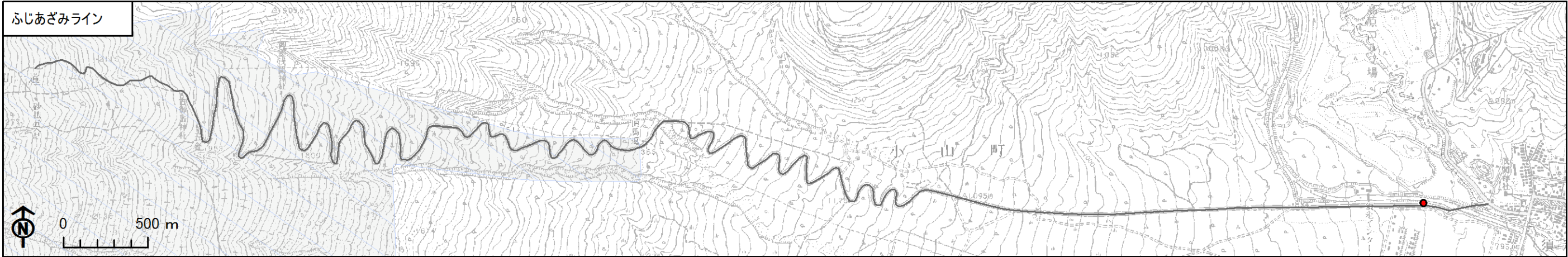
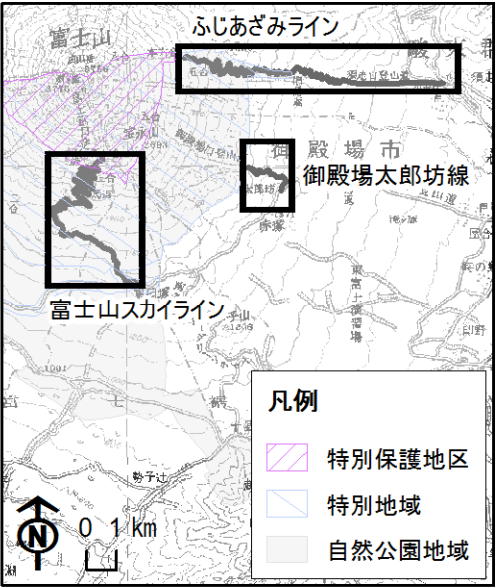


図 2.1.57 外来種（オオブタクサ）確認地点位置図

7) オオアレチノギク

オオアレチノギクは、ふじあざみラインの標高約 970m の車道脇で 1 地点 1 個体確認された。9 月調査で開花が確認されており、種子の拡散が懸念される。国立公園内での確認はなかった。

表 2.1.12 種の解説（オオアレチノギク）

種名等	オオアレチノギク（キク科） 別名：オオムカシヨモギ	
写真		
	個体（ふじあざみライン） 平成 26 年 9 月 19 日撮影	生育環境（ふじあざみライン） 平成 26 年 9 月 19 日撮影
外来種選定基準※	要注意外来生物 類型 2 （被害に係る知見が不足しており、引き続き情報の集積に努める外来生物）	
特徴※	キク科の一〜越年草で、高さは 0.8〜1.8m。開花期は 8〜10 月。頭状花。虫媒花。瘦果は、風（遠方まで飛散）、雨、植物自身、人間により伝播される。1 個体当たりの種子生産量は 114,816 個、種子の寿命は 50 年以上との報告がある。	
生育環境※	温帯〜熱帯に分布する。荒地、畑地、樹園地、牧草地、路傍、空地などに生育する。土壌の種類や環境条件に対する適応性が高い。	
原産地・分布※	南アメリカ原産、アフリカ、アジア、オセアニアに分布する。国内へは、非意図的導入により侵入したと考えられ、1920 年に東京で確認された。北海道〜九州、琉球、小笠原に分布する。	
被害影響※	競争力が強く除草剤耐性型があるため、畑地、樹園地、牧草地に普通にみられる雑草になっている。	

※環境省 HP (<http://www.env.go.jp/nature/intro/>) より引用

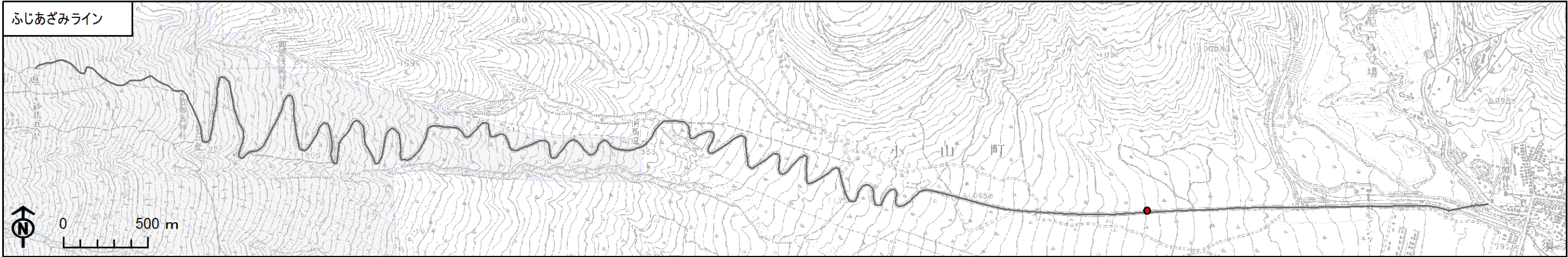
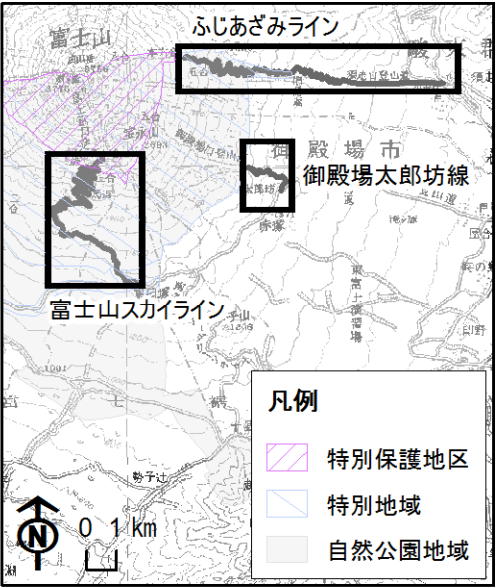


図 2.1.58 外来種（オオアレチノギク）確認地点位置図

8) ヒメムカシヨモギ

ヒメムカシヨモギは、ふじあざみラインの標高約 840m～1,030m の車道脇で 23 地点 68 個体が確認された。9 月調査で開花が確認されており、種子の拡散が懸念される。国立公園内での確認はなかった。

表 2.1.13 種の解説（ヒメムカシヨモギ）

種名等	ヒメムカシヨモギ（キク科）	
写真		
外来種選定基準※	要注意外来生物 類型 2 （被害に係る知見が不足しており、引き続き情報の集積に努める外来生物）	
特徴※	キク科の一〜越年草で、高さは 0.8～2m になる。開花期は 8～10 月。頭状花をつける。瘦果は、風（遠方まで飛散）、雨、人間により伝播される。1 個体当たりの種子の生産量は、59,960～819,620 個との報告がある。種子の寿命は 112 年に及ぶとの報告がある。	
生育環境※	畑地、休耕地、樹園地、牧草地、路傍、荒地、河川敷などに生育する。肥沃地を好み、耐旱性が大きい。	
原産地※	北アメリカ原産、南アメリカ、ヨーロッパ、アフリカ、オセアニアに分布する。非意図的導入により 1867 年頃に侵入したとされる。全国に分布する。	
被害影響※	主に河川敷等に生育する河原の固有の在来種と競合し、駆逐するおそれがある。	

※環境省 HP（<http://www.env.go.jp/nature/intro/>）より引用

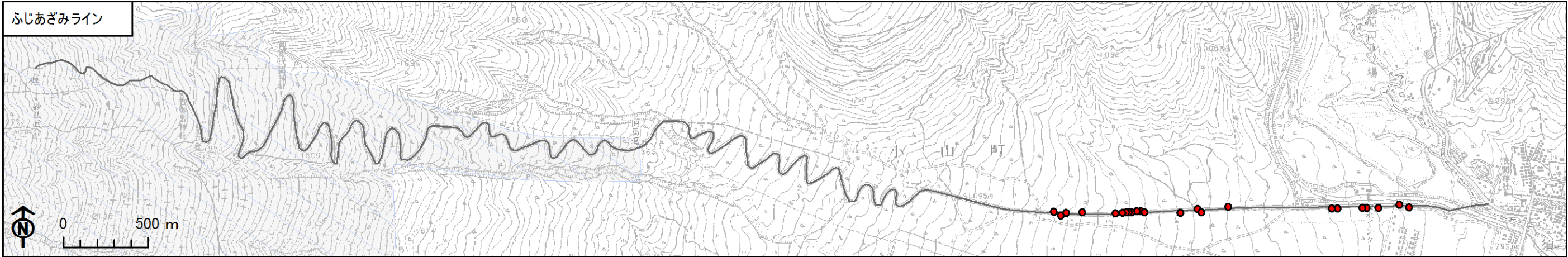
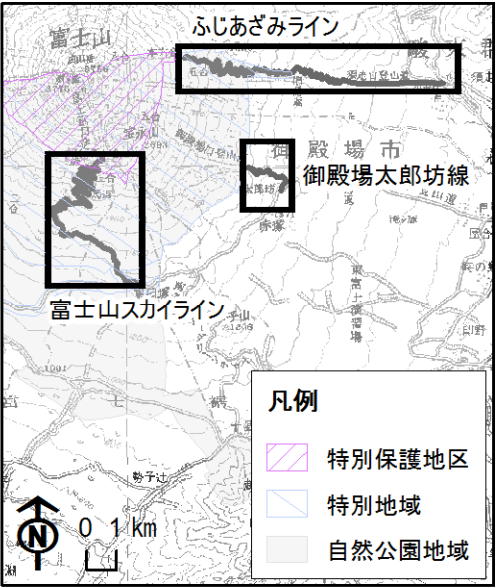


図 2.1.59 外来種（ヒメムカシヨモギ）確認地点位置図

9) ハルジオン

ハルジオンは、富士山スカイラインの標高約 880m～1,790m の車道脇で、10 地点 18 個体、御殿場太郎坊線の標高約 1,280m～1,440m の車道脇及び駐車場で 3 地点 22 個体、ふじあざみラインの標高約 810m～1,600m の車道脇で 69 地点 782 個体が確認された。6 月調査及び 7 月調査で開花が確認されており、種子の拡散が懸念される。国立公園第 1 種特別地域、第 2 種特別地域、第 3 種特別地域内で確認された。

表 2.1.14 種の解説（ハルジオン）

種名等	ハルジオン（キク科） 別名：ハルシオン、ハルジョオン	
写真	 個体（富士山スカイライン） 平成 26 年 7 月 28 日撮影	 生育環境（富士山スカイライン） 平成 26 年 7 月 28 日撮影
外来種選定基準※	要注意外来生物 類型 1 （被害に係る一定の知見があり、引き続き指定の適否について検討する外来生物）	
特徴※	キク科の一年草～多年草で、高さは 0.3～1m である。開花期は 4～8 月。頭状花。虫媒花。瘦果は風、雨、動物、人間により伝播される。根茎により繁殖する。	
生育環境※	水田畦畔、牧草地、路傍、畑地、堤防、荒地などに生育する。窒素分の多い場所を好む。	
原産地※	北アメリカ原産、東アジアに分布する。国内へは、1920 年頃に観賞用に導入された。全国に分布する。	
被害影響※	繁殖力や定着力が強く、在来種と競合し駆逐のおそれがある。抜き取り、刈り取り、除草剤の散布によって防除が行われている。刈り取りや踏みつけに耐性が強いとされる。	

※環境省 HP（<http://www.env.go.jp/nature/intro/>）より引用

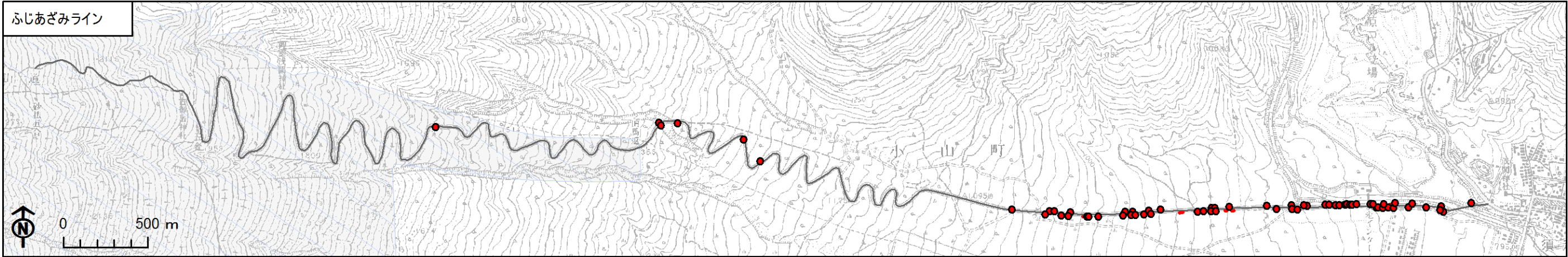


図 2.1.60 外来種（ハルジオン）確認地点位置図

10) セイタカアワダチソウ

セイタカアワダチソウは、ふじあざみラインの標高約1,030mの車道脇で1地点1個体が確認された。開花期前の春季調査で確認され、夏季、秋季調査では確認なかったため、開花は確認されなかった。ふじあざみラインでは、夏の調査前に車道周辺の草刈りが実施されており、草刈りにより地上部が刈り取られたと思われる。国立公園内での確認はなかった。

表 2.1.15 種の解説（セイタカアワダチソウ）

種名等	セイタカアワダチソウ（キク科） 別名：セイタカアキノキリンソウ	
写真	 個体（ふじあざみライン） 平成26年6月4日撮影	 生育環境（ふじあざみライン） 平成26年6月4日撮影
外来種選定基準※	要注意外来生物 類型1 （被害に係る一定の知見があり、引き続き指定の適否について検討する外来生物）	
特徴※	キク科の多年生草本で、高さ0.5～3m。開花期は8～11月。頭状花。虫媒花。1株当たり21,000～50,000個の種子をつけるとの報告がある。瘦果は風などにより伝播される。地下茎により繁殖する。アレロパシー作用を持つとされる。	
生育環境※	温帯に分布する。河川敷、土手、荒地、原野、休耕地、路傍、空地などに生育する。森林内に入ることはなく、造成によって攪乱された環境が増えると繁茂する。粒径の細かいシルトから粘土質の土壤に繁茂する。	
原産地・分布※	北アメリカ原産、ヨーロッパ、アジアに分布する。国内へは、観賞用、密源植物として1897年頃に導入され、現在では全国で見られる。	
被害影響※	河川敷に侵入し、絶滅危惧種のフジバカマや、オギ、ススキ、アズマネザサ等の在来植物と競合し、衰退要因の一つとなっている。特定植物群落調査の追加調査において、地域の植物群落に対する圧力要因の一つとして、セイタカアワダチソウの侵入があげられている。様々な草原に侵入し、在来種を駆逐するため、各種草原の種多様性を損なうおそれがある。	

※環境省 HP（<http://www.env.go.jp/nature/intro/>）より引用

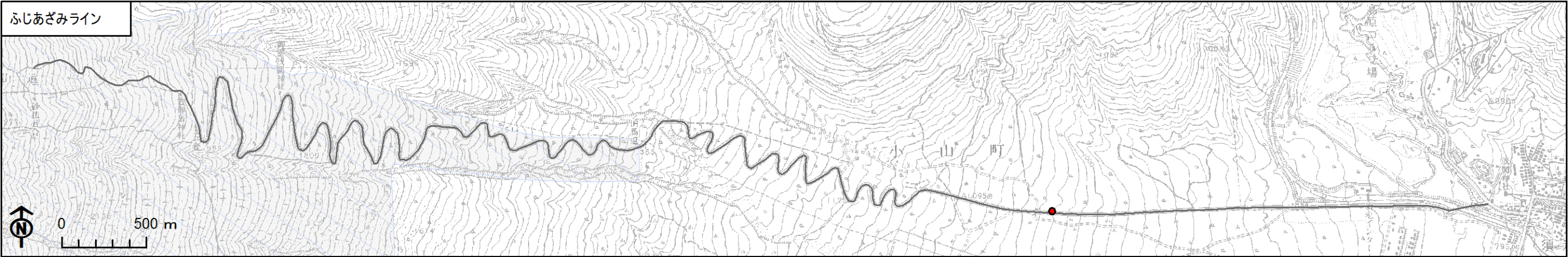
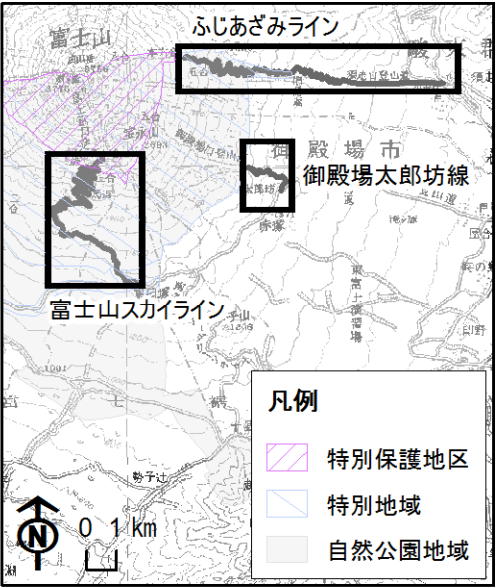


図 2.1.61 外来種（セイタカアワダチソウ）確認地点位置図

11) ヒメジョオン

ヒメジョオンは、富士山スカイラインの標高約 1,460m～1,710m の車道脇で、27 地点 219 個体、御殿場太郎坊線の標高約 1,280m～1,430m の車道脇で 8 地点 134 個体、ふじあざみラインの標高約 800m～1,360m の車道脇で 100 地点 605 個体が確認された。7 月調査及び 9 月調査で開花が確認されており、種子の拡散が懸念される。国立公園第 2 種特別地域、第 3 種特別地域内で確認された。

表 2.1.16 種の解説（ヒメジョオン）

種名等	ヒメジョオン（キク科）	
写真		
	個体（ふじあざみライン） 平成 26 年 7 月 30 日撮影	生育環境（ふじあざみライン） 平成 26 年 7 月 30 日撮影
外来種選定基準※	要注意外来生物 類型 2 （被害に係る知見が不足しており、引き続き情報の集積に努める外来生物）	
特徴※	キク科の一〜越年草で、高さは 0.3～1.5m になる。開花期は 6～10 月。頭状花。虫媒花。瘦果は、風、雨、動物、人間により伝播される。1 個体当たりの種子生産量は 47,923 個に及ぶとの報告がある。種子の寿命が 35 年にも及ぶとの報告がある。根茎により繁殖する。	
生育環境※	温帯に生育する。低地から高山地帯にまでみられる。畑地、樹園地、牧草地、路傍、荒地、草原などに生育する。土壌の種類を選ばず、土壌環境に対する適応性が大きい	
原産地・分布※	北アメリカ原産、ヨーロッパ、アジアに分布する。1865 年頃に観賞用として導入され、現在では全国に分布している。	
被害影響※	繁殖力が強く、亜高山帯等の自然性の高い環境にも侵入し、在来植物と競合のおそれがあるため、駆除が実施されている。国立公園内の亜高山帯といった自然性の高い地域に侵入し、在来植物との競合が問題になっている。	

※環境省 HP（<http://www.env.go.jp/nature/intro/>）より引用

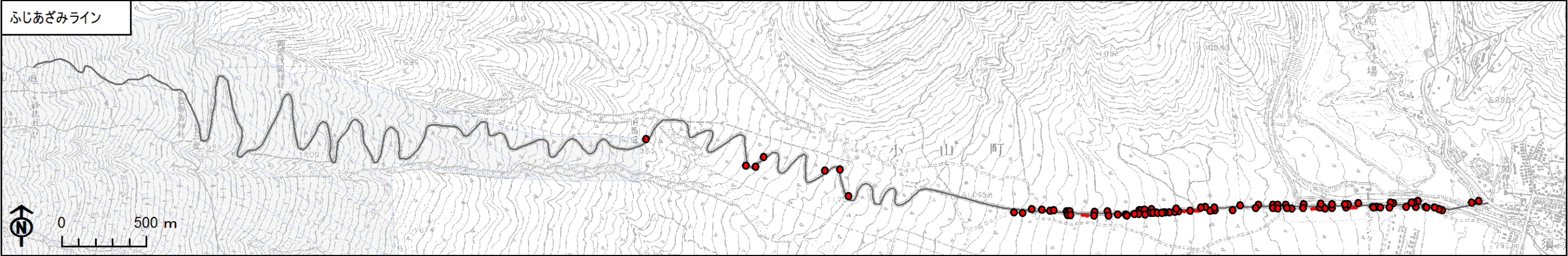
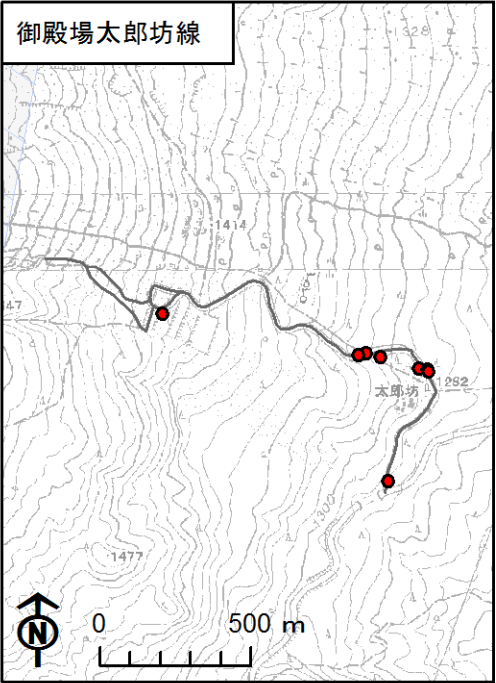
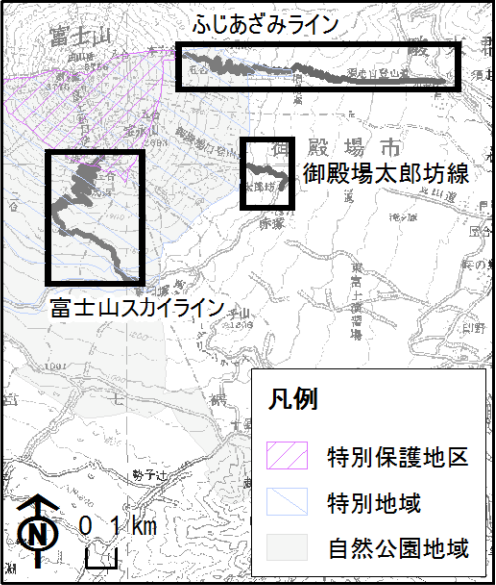
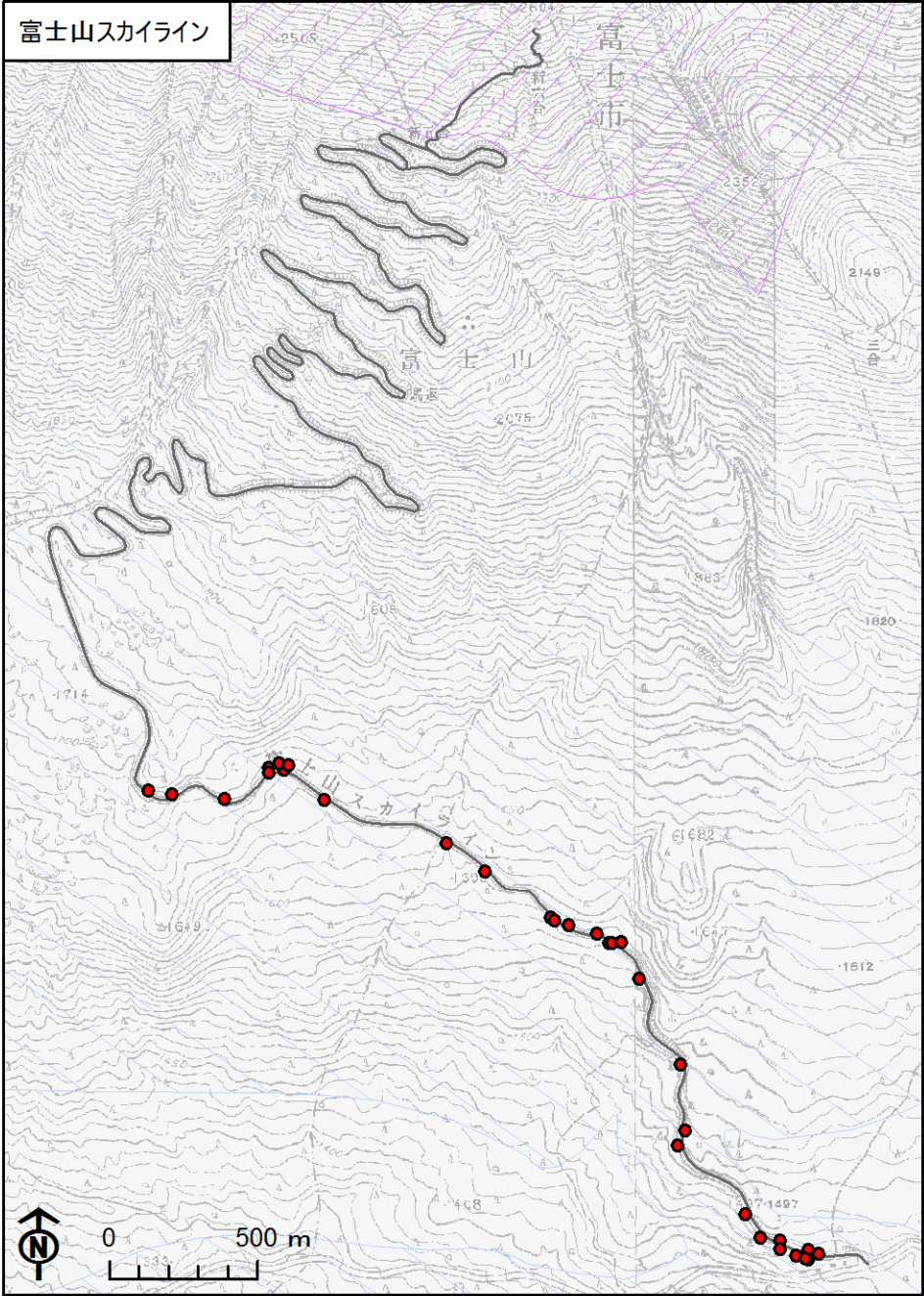


図 2.1.62 外来種（ヒメジョオン）確認地点位置図

12) セイヨウタンポポ (外来タンポポ種群)

セイヨウタンポポは、富士山スカイラインの標高約 1,460m～2,380m の車道脇で、301 地点 4,510 個体、御殿場太郎坊線の標高約 1,280m～1,440m の車道脇で 29 地点 122 個体、ふじあざみラインの標高約 800m～1,930m の車道脇で 157 地点 728 個体が確認された。6 月、7 月の調査で開花及び結実が確認されており、種子の拡散が懸念される。国立公園第 1 種特別地域、第 2 種特別地域、第 3 種特別地域内で確認された。

表 2.1.17 種の解説 (セイヨウタンポポ)

種名等	セイヨウタンポポ (キク科) 要注意外来生物における種名：外来タンポポ種群	
写真	 個体 (富士山スカイライン) 平成 26 年 6 月 3 日撮影	 生育環境 (富士山スカイライン) 平成 26 年 6 月 3 日撮影
外来種選定基準※	要注意外来生物 類型 2 (被害に係る知見が不足しており、引き続き情報の集積に努める外来生物)	
特徴※	キク科の多年草で、高さは 0.1～0.4m。開花期は 3～5 月。単為生殖により結実する。瘦果は風 (遠方まで飛散)、雨、動物、人間などにより伝播される。1 個体当たりの種子の生産量は 2,400～20,800 個とする報告がある。種子の寿命は数年とされる。根茎切片による繁殖力は強く、どの部分の切片からも出芽する。	
生育環境※	寒帯～熱帯に分布する。路傍、空地、畑地、牧草地、芝地、樹園地、川岸、山地などに生育する。日当たりが良い平地で、弱酸性土壌に多い。肥沃地を好む。	
原産地・分布※	ヨーロッパ原産、南北アメリカ、アジア、アフリカ、オセアニアに分布する。国内へは、1904 年北海道で確認された。食用、飼料、緑化材として導入されるとともに、非意図的移入 (輸入物資や牧草に混入) もあるとされる。全国に分布する。	
被害影響※	繁殖力が強く、国立公園内の亜高山帯等の自然性の高い環境にも侵入し、在来種との競合のおそれがある。在来種との雑種が全国的にみられ、遺伝的攪乱が既に広く起こっていることが確認されている。	

※環境省 HP (<http://www.env.go.jp/nature/intro/>) より引用

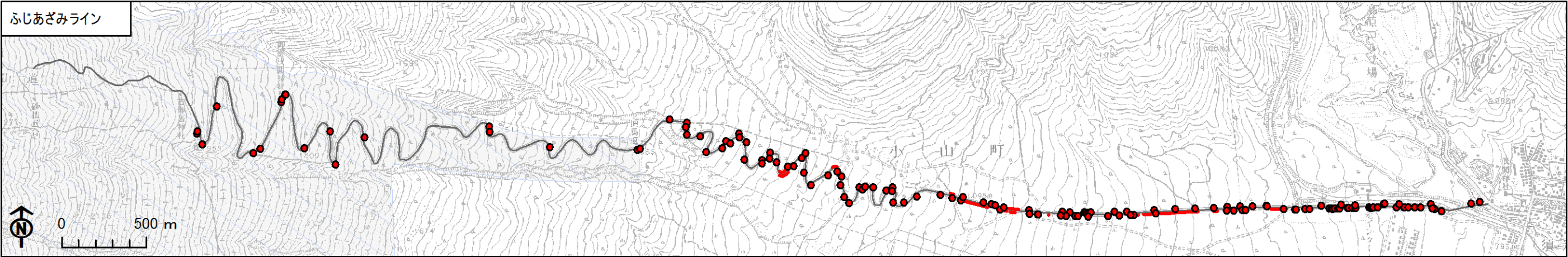
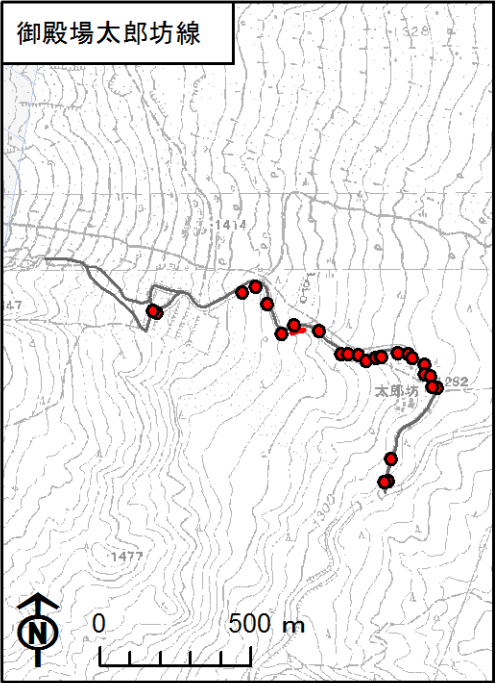
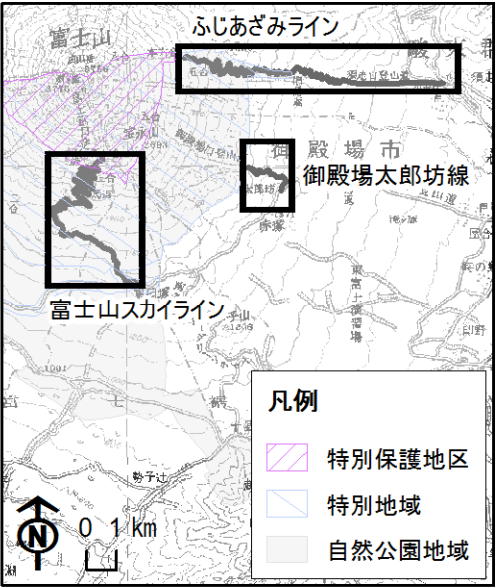
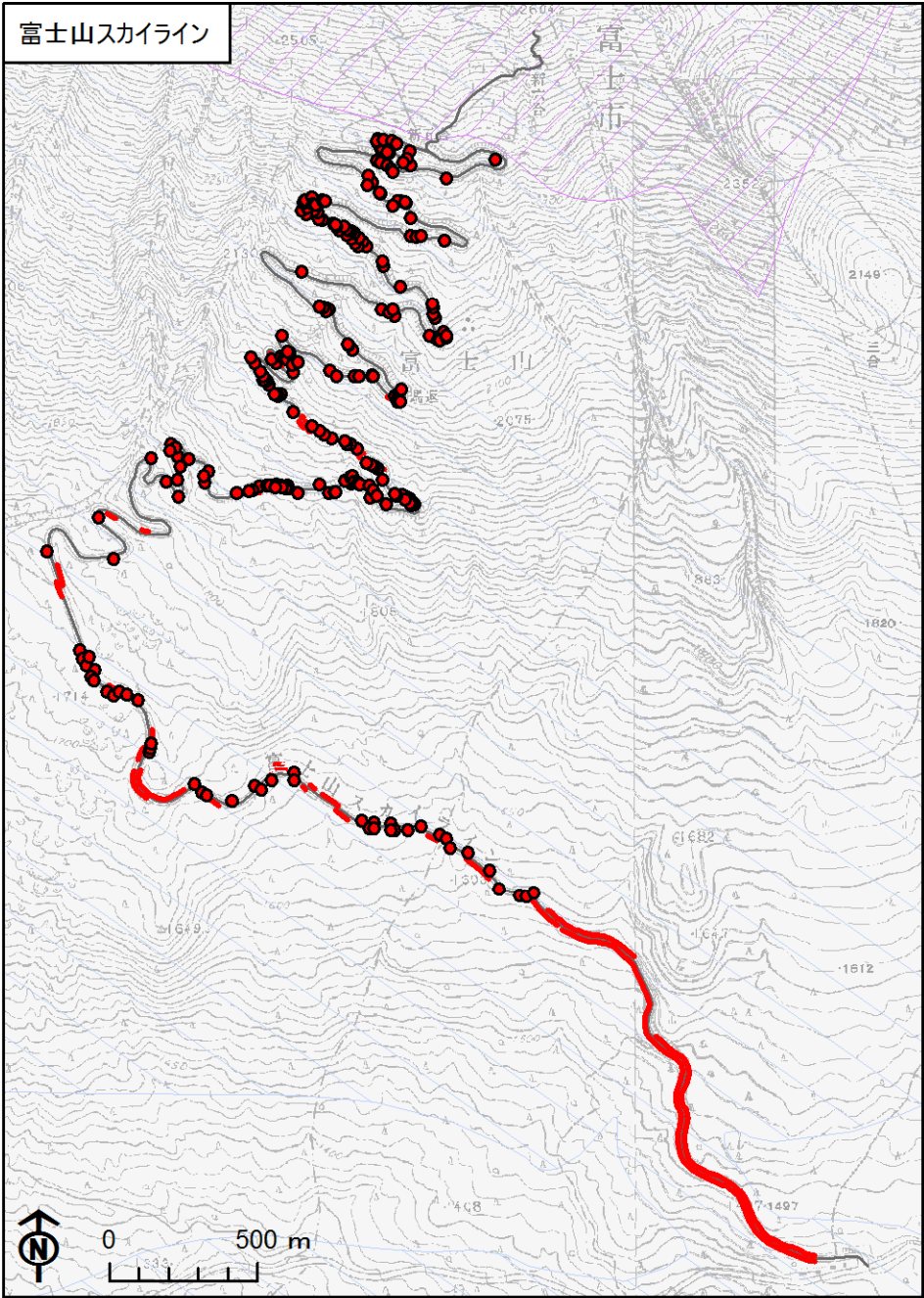


図 2.1.63 外来種 (セイヨウタンポポ) 確認地点位置図

13) メリケンカルカヤ

メリケンカルカヤは、ふじあざみラインの標高約 880m～1,020m の車道脇で 6 地点 52 個体が確認された。6 月調査では昨年生長した個体の枯死跡、9 月調査では今年開花した個体が確認されており、継続的に生育していると思われる。開花が確認されているため、種子の散布が懸念される。国立公園内での確認はなかった。

表 2.1.18 種の解説（メリケンカルカヤ）

種名等	メリケンカルカヤ （イネ科）	
写真	 個体（ふじあざみライン） 平成 26 年 9 月 19 日撮影	 生育環境（ふじあざみライン） 平成 26 年 9 月 19 日撮影
外来種選定基準※	要注意外来生物 類型 2 （被害に係る知見が不足しており、引き続き情報の集積に努める外来生物）	
特徴※	イネ科の多年草で、高さ 0.5～1m。開花期は 9～10 月。穎果は主に風により伝播される。種子生産量は多い。根茎により繁殖する。	
生育環境※	畑地、水田畦畔、樹園地、牧草地、路傍、荒地、市街地の芝地などに生育する。日当たりの良い、土壌が乾いた所に多く、土壌の種類は選ばない。	
原産地※	北アメリカ原産、南アメリカ、東アジア、オーストラリア、太平洋諸島に分布する。国内では、1940 年頃に愛知県で確認された。本州～九州に分布する。	
被害影響※	神奈川県などの各地で、近年になっても増加がみられ、在来種との競合・駆逐のおそれがある。	

※環境省 HP（<http://www.env.go.jp/nature/intro/>）より引用

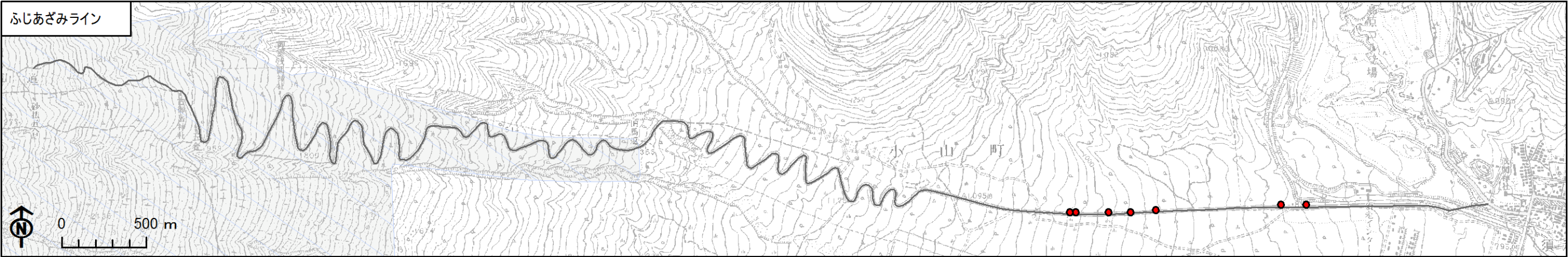
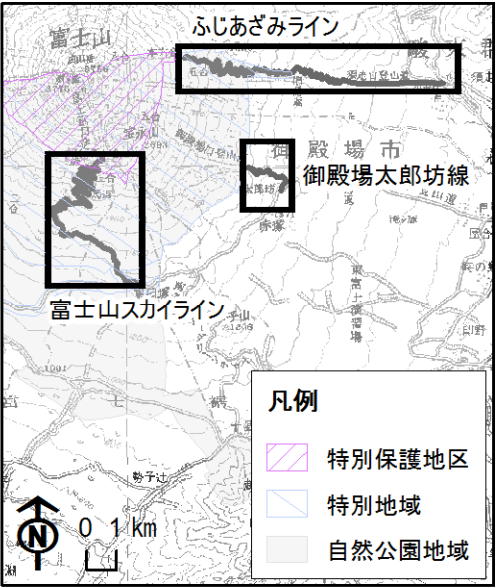


図 2.1.64 外来種（メリケンカルカヤ）確認地点位置図

14) カモガヤ

カモガヤは、富士山スカイラインの標高約 842m～2,370m の車道脇で、22 地点 212 個体、御殿場太郎坊線の標高約 1,430m 付近の駐車場で 4 地点 12 個体、ふじあざみラインの標高約 820m～900m の車道脇で 10 地点 317 個体が確認された。6 月調査及び 7 月調査で開花・結実が確認されており、種子の拡散が懸念される。国立公園第 1 種特別地域、第 2 種特別地域、第 3 種特別地域内で確認された。

表 2.1.19 種の解説（カモガヤ）

種名等	カモガヤ（イネ科） 英名：オーチャードグラス	
写真	 個体（ふじあざみライン） 平成 26 年 6 月 4 日撮影	 生育環境（ふじあざみライン） 平成 26 年 6 月 4 日撮影
外来種選定基準※	要注意外来生物 類型 4 （別途総合的な取組みを進める外来生物(緑化植物)）	
特徴※	イネ科の多年生草本で、高さは 0.4～1.5m。多くの桿を束生する。開花期は 7～8 月。両性花。風媒花。穎果は風、動物（胃中でも生存）、人間により伝播される。再生力は旺盛で、根茎による栄養繁殖を行う。永年草地の基幹草種として、採草及び放牧用に山岳地帯を含む全国で用いられている。耐寒性に優れ、耐暑性、耐旱性、大気汚染耐性もある。	
生育環境※	畑地、樹園地、河原、土手、空地、牧草地、路傍、荒地などに生育する。日当たりの良い温暖地で、肥沃な所を好む。	
原産地・分布※	ヨーロッパ原産、アフリカ、アジア、オセアニア、南北アメリカに分布する。国内へは、1860 年代にアメリカ東北部から北海道に導入された。牧草として各地に導入されて野生化し、現在では全国に分布する。	
被害影響※	北海道や、本州の亜高山帯にある国立・国定公園に侵入するなどしており、固有性の高い生態系や脆弱な生態系において、植物群集の構造を改変しているとの報告がある。	

※環境省 HP（<http://www.env.go.jp/nature/intro/>）より引用

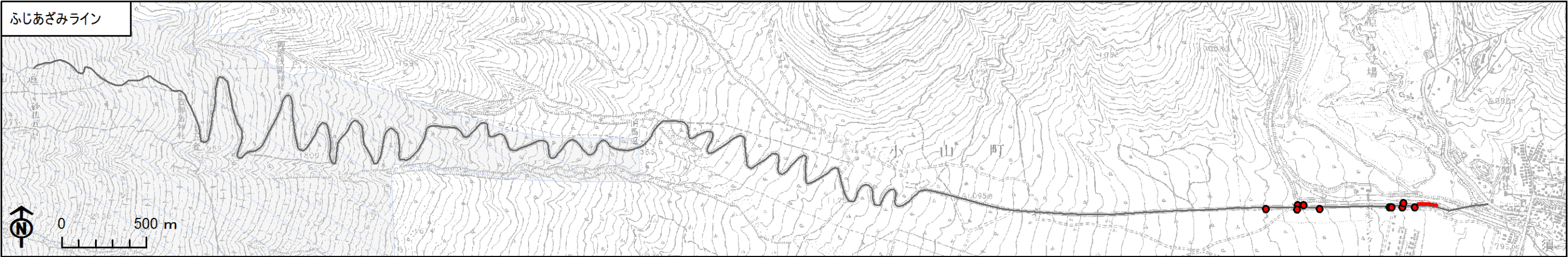
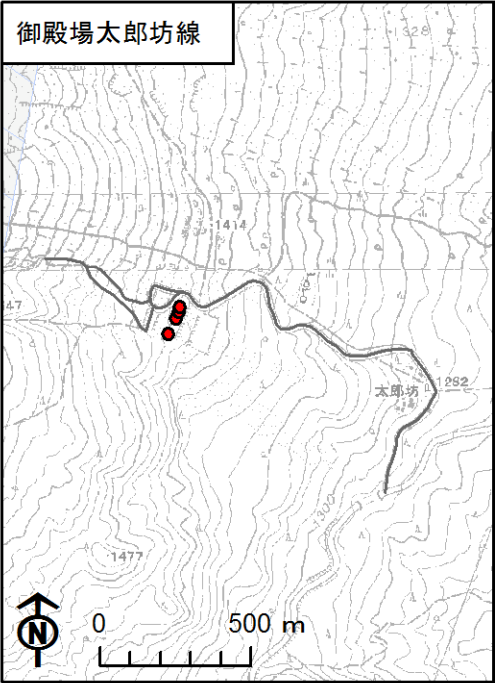
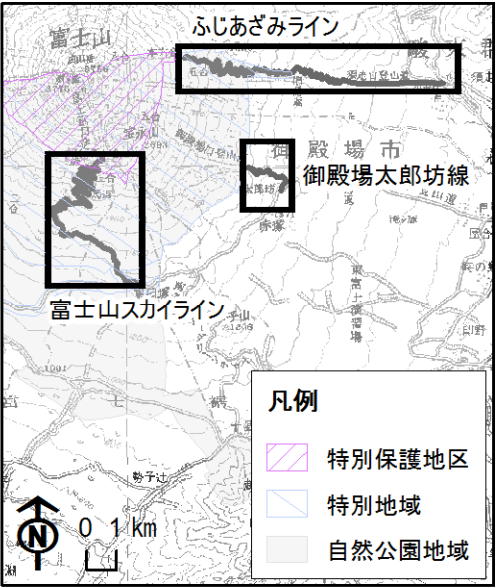
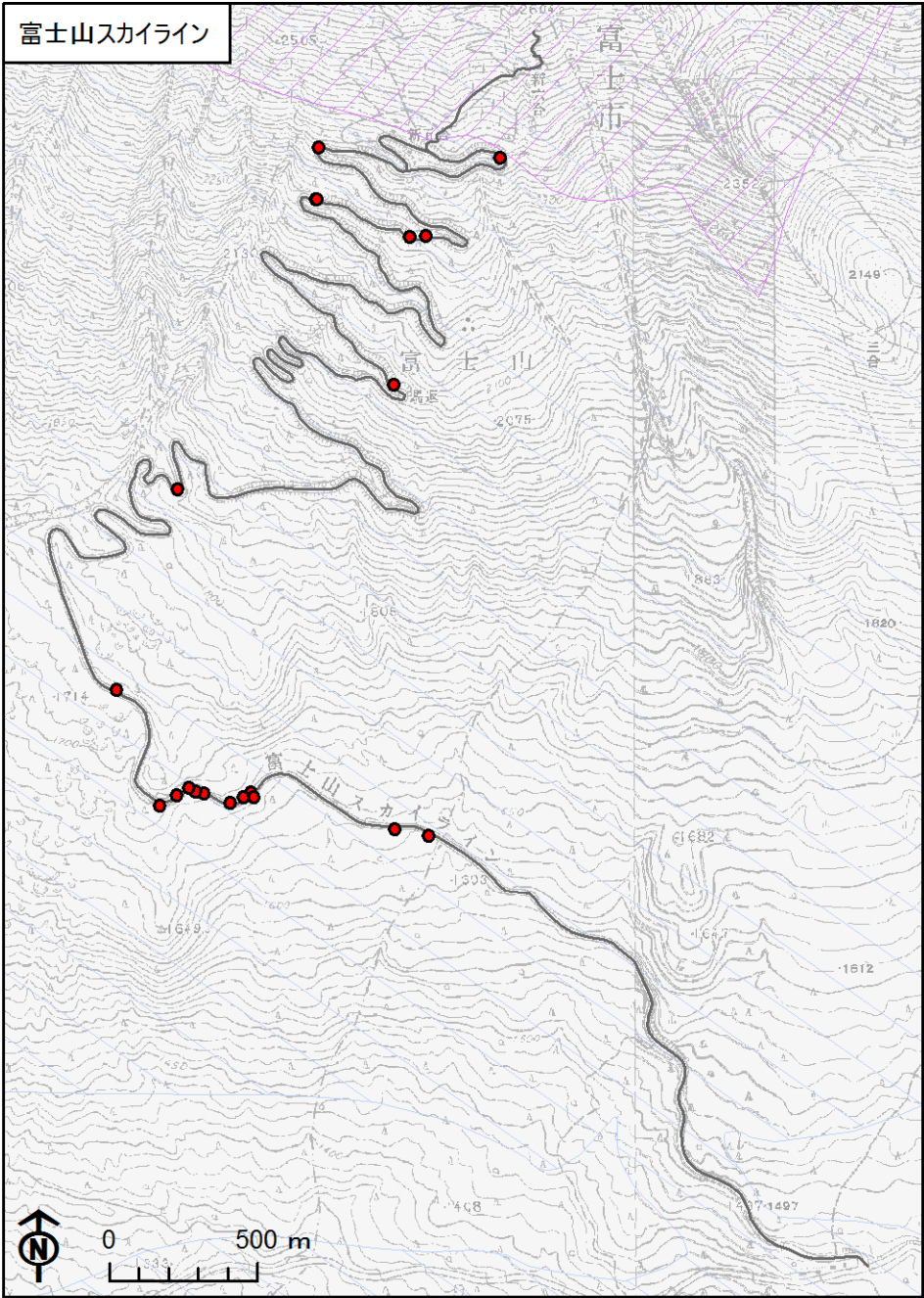


図 2.1.65 外来種（カモガヤ）確認地点位置図

15) オニウシノケグサ

オニウシノケグサは、富士山スカイラインの標高約 2,010m の車道脇で 1 地点 1 個体、ふじあざみラインの標高 1,050m の車道脇で 1 地点 1 個体、標高約 850m の車道脇で 2 地点 21 個体が確認された。いずれの地点も結実が確認されており、種子の拡散が懸念される。国立公園第 1 種特別地域内で確認された。

表 2.1.20 種の解説（オニウシノケグサ）

種名等	オニウシノケグサ（イネ科） 英名：トールフェスク	
写真	 個体（富士山スカイライン） 平成 26 年 7 月 28 日撮影	 生育環境（富士山スカイライン） 平成 26 年 7 月 28 日撮影
外来種選定基準※	要注意外来生物 類型 4（別途総合的な取組みを進める外来生物(緑化植物)）	
特徴※	イネ科の多年生草本で、高さは 0.5～2.0m。開花期は 7～10 月。両性花。風媒花。種子の生産量は多く、穎果は雨、風、動物、人間により伝播される。根茎による栄養繁殖を行う。	
生育環境※	牧草地、運動場、庭、路傍、畑地、樹園地、荒地などに生育する。日当たりの良い、肥沃で水分の豊富なやや重粘土壌を好むが、酸性土壌に耐えるなど、土壌への適応性は高い。地下茎と地中深く伸びる根群により耐旱性がある上、耐暑性、耐寒性もある。	
原産地※	ヨーロッパ、北アフリカ、西～中央アジア、シベリア原産で、オセアニア、南北アメリカに分布する。国内へは、1905 年に導入された。牧草、砂防用、法面緑化用として各地に導入されたものが野生化し、現在では全国に分布する。	
被害影響※	北海道や本州の亜高山帯にある国立・国定公園など、自然性の高い環境や希少種の生育場所に侵入し、駆除の対象になっている。	

※環境省 HP（<http://www.env.go.jp/nature/intro/>）より引用

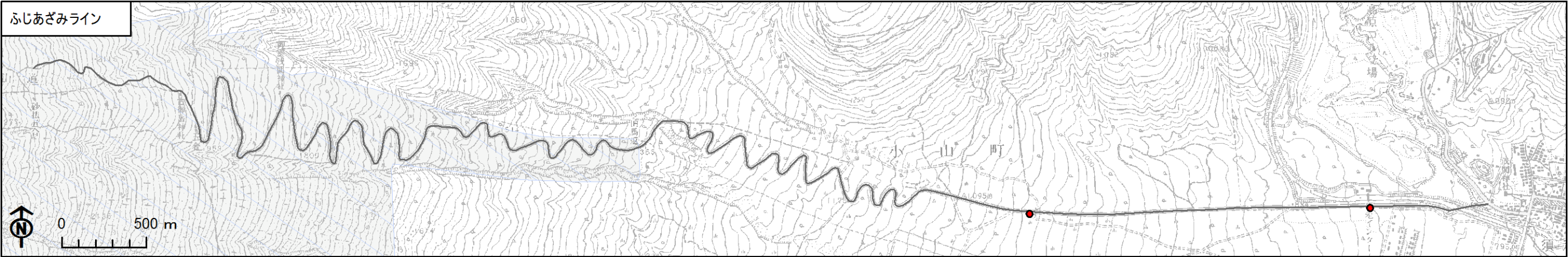
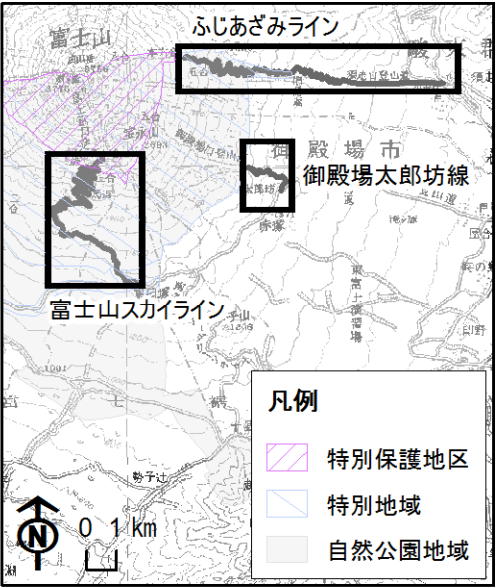
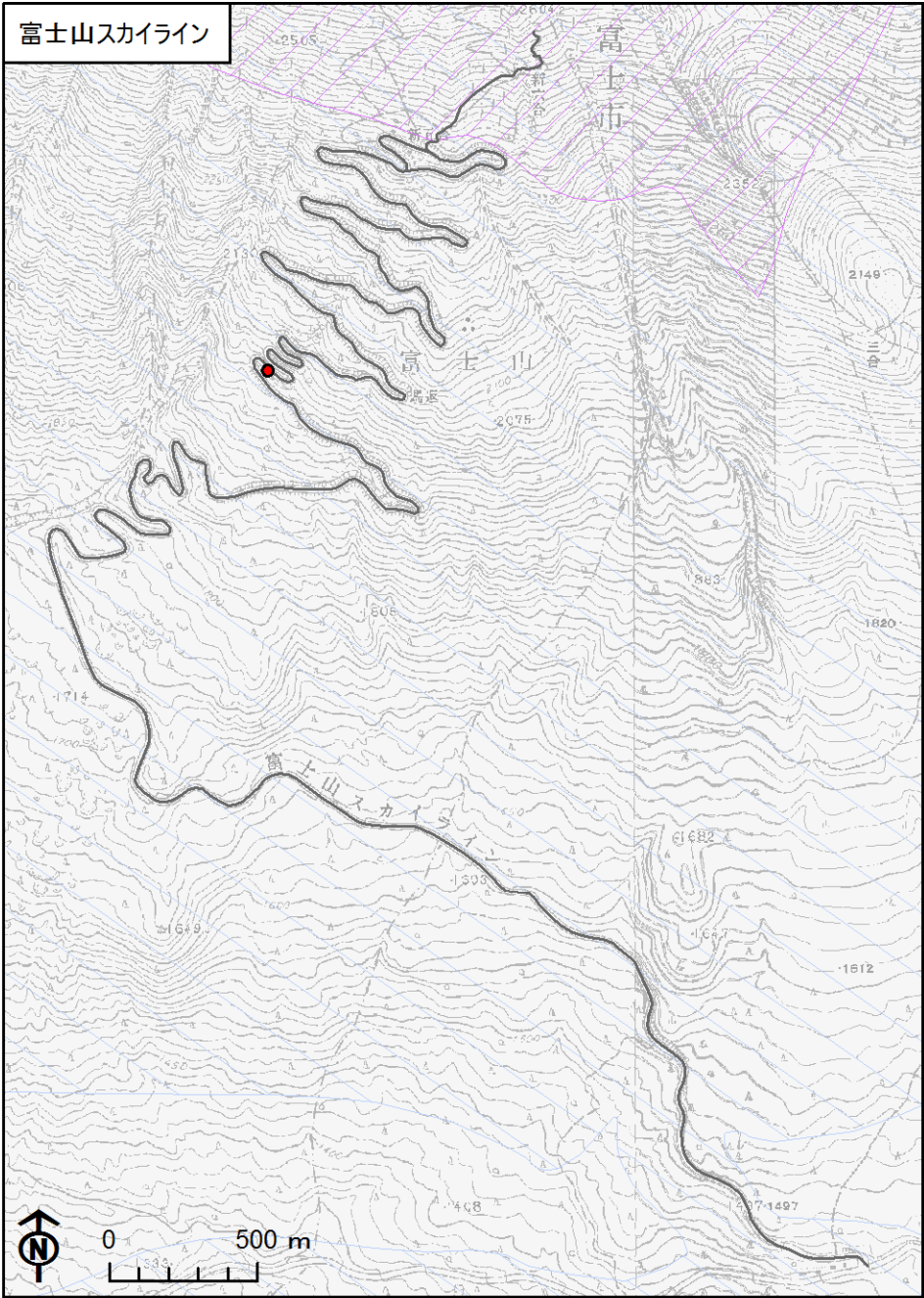


図 2.1.66 外来種（オニウシノケグサ）確認地点位置図

16) オオアワガエリ

オオアワガエリは、富士山スカイラインの標高約 1,610m～2,360m の車道脇で、94 点 661 個体、御殿場太郎坊線の標高約 1,440m 道脇で 1 地点 2 個体、ふじあざみラインの標高約 830m～2,360m の車道脇で 1 地点 1 個体が確認された。7 月調査及び 8 月調査で開花・結実が確認されており、種子の拡散が懸念される。国立公園第 1 種特別地域、第 2 種特別地域、第 3 種特別地域内で確認された。

表 2.1.21 種の解説（オオアワガエリ）

種名等	オオアワガエリ（イネ科） 英名：チモシー	
写真		
	個体（富士山スカイライン） 平成 26 年 7 月 28 日撮影	生育環境（富士山スカイライン） 平成 26 年 7 月 28 日撮影
外来種選定基準※	要注意外来生物 類型 4 （別途総合的な取組みを進める外来生物(緑化植物)）	
特徴※	イネ科の多年草で、高さは 0.5～1.5m。開花期は 6～8 月。両性花。風媒花。穎果は風、雨、動物、人間などにより伝播される。種子生産量は多く、種子の寿命は 4 年以上との報告がある。茎の基部節間が肥大した球茎により繁殖する。	
生育環境※	畑地、樹園地、路傍、荒地、河川敷、牧草地などに生育する。冷涼で多湿の気候を好み、高温や乾燥には弱い。肥沃な日当たりの良い所を好む。	
原産地・分布※	ヨーロッパ原産、アジア、オセアニア、南北アメリカで牧草として導入された。国内へは、1874 年に北海道に牧草として試植後、全国に広がった。	
被害影響※	北海道や、本州の亜高山帯にある国立・国定公園など、自然性の高い環境や希少種の生育環境に侵入し、駆除の対象になっている	

※環境省 HP (<http://www.env.go.jp/nature/intro/>) より引用

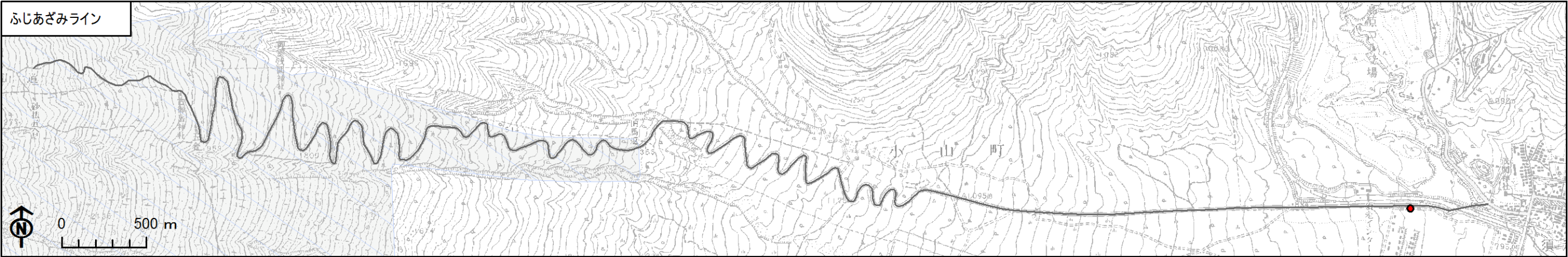
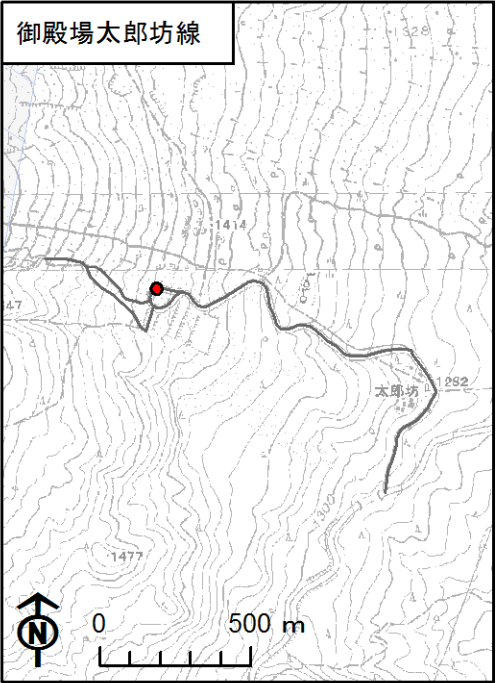
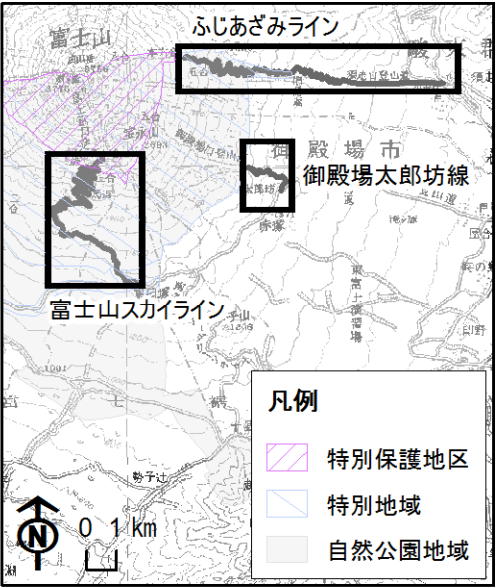
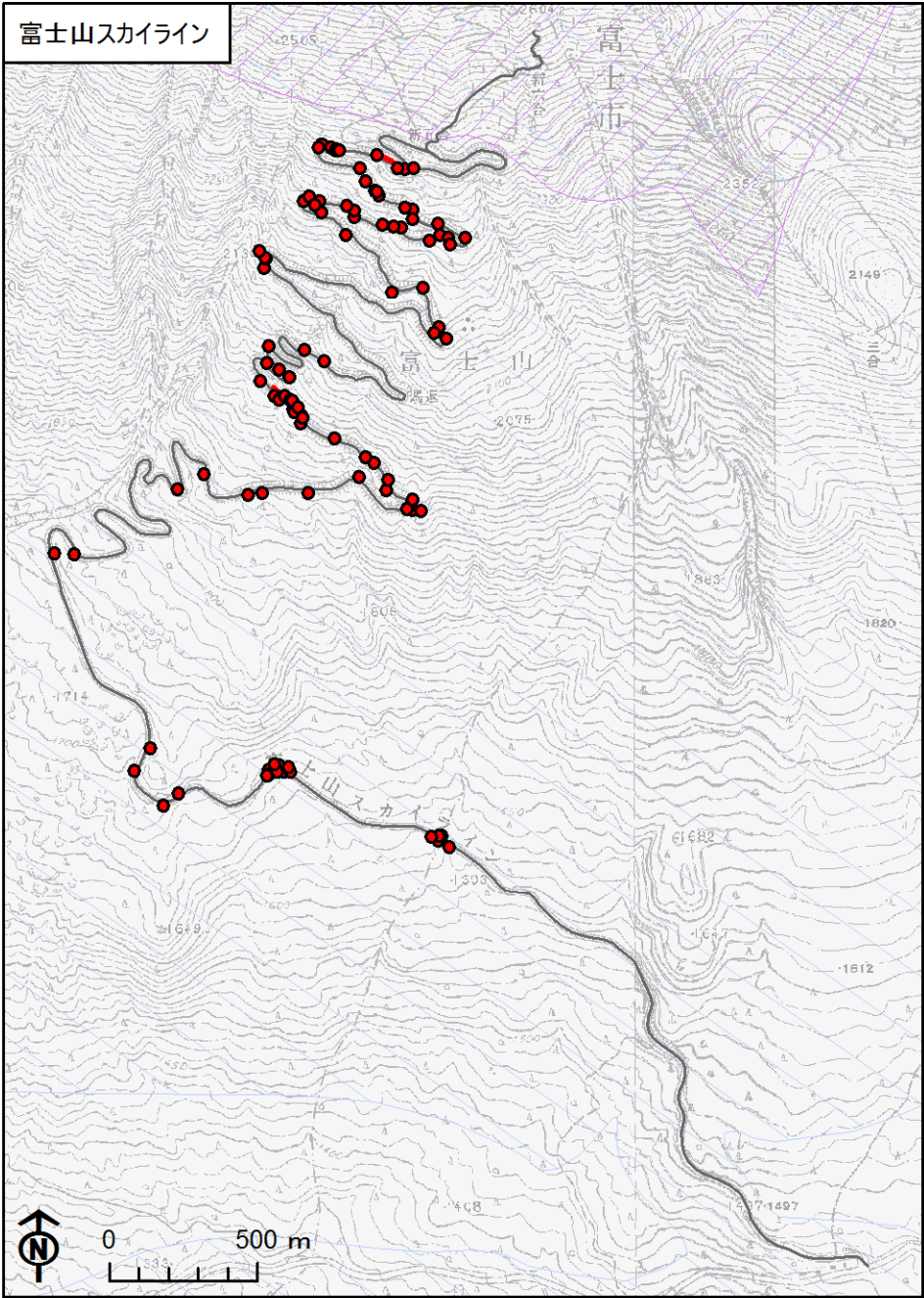


図 2.1.67 外来種（オオアワガエリ）確認地点位置図